

“ロータリー” 原点への回帰

2016-17 年度

Intercity Meeting Report



日時：2017年4月22日（土）

場所：赤とんぼ文化ホール・たつの市青少年館

国際ロータリー第2680地区西播第二グループ

赤穂・相生・上郡佐用・龍野

ホストクラブ：龍野ロータリークラブ

目 次

巻頭言 「ロータリーの原点をたどる」	1
はじめに	3
講演 「ロータリーの夢と哲学～21世紀のロータリー～」	4
質疑 「ロータリーとは何だろう」	23
寄稿 「人類の繁栄とロータリー運動」	28
西播第二グループ 感想	
赤穂ロータリークラブ	32
相生ロータリークラブ	36
上郡佐用ロータリークラブ	42
龍野ロータリークラブ	45
あとがき	48

巻頭言 ロータリーの原点をたどる

国際ロータリー第 2680 地区パストガバナー 滝澤功治(神戸須磨)

2016-17 年度国際ロータリー第 2680 地区西播第 2 グループの IM が、久保泰造ガバナー補佐のリーダーシップの下、盛大に開催されたことをお慶び申し上げます。

今回の IM は、「“ロータリー”原点への回帰」をテーマとし、当地区きっての論客である久野薫パストガバナーと中村尚義パストガバナーをスピーカーに迎え、まことに重厚な内容の、聞き応えのある会合でした。

ロータリーでは英語の用語が多いのでわかりにくいという声を聞きます。確かに上記の文章中にも、IM であるとかパストガバナーという用語が出てきます。なぜ英語を翻訳せずに、そのまま使うのでしょうか。

ロータリーは 1905 年に創立されたシカゴロータリークラブに始まりますが、その後 10 年ほどの間にアメリカ本国のみならず、大西洋を越えて英国やアイルランドに及び、さらに 1916 年には非英語圏であるキューバのハバナにクラブが創立され、ロータリーは拡大していきました。そして 1919 年には東洋最初のクラブがフィリピンのマニラに創立されます。このように、ロータリーは瞬く間に世界に拡大していくのですが、各クラブはそれぞれに独自の定款を持ち、クラブ運営にもある程度の自主性が認められていたようです。当時の連合組織である国際ロータリークラブ連合会は、自らの定款に設立趣旨を記述した「ロータリーの目的」条項を規定し、各クラブにもその定款中にこれを採用するように求めていましたが、それは「推奨(recommended)」にとどまり、強制ではなかったということです。

1922 年、国際ロータリー(RI)が創立されました。このとき、「ロータリーの目的」条項を含む「標準(standard)ロータリークラブ定款」を定め、各クラブにその採用を義務付けました。世界中のクラブが共通の目的、理念に基づいて設立、運営されるためです。ここにロータリーは初めて同質の団体になったといえるでしょう。ところで、この標準ロータリークラブ定款の原文は英語ですから、非英語圏の国のクラブは、それぞれの言語に自ら翻訳してクラブ定款としました。それぞれのクラブ定款は、言語は異なっても、内容は本来同一のはずです。しかし、あるとき、各国語の翻訳版の標準ロータリークラブ定款を再度英語に翻訳し、比較したところ、余りの違いに RI の担当者は愕然となり、以後、RI は公式言語としていくつかの言語を指定し、標準ロータリークラブ定款のみならずすべての RI の文書について、RI の職員による公式翻訳以外には公式文書として認めないことになったという話を聞いたことがあります。それは同じ言葉であっても、国によって違う解釈で取り込むことを防ぐためだと思われます。よく指摘されているように、ロータリーで最も重要な言葉である“service”は、日本語で「奉仕」と訳すと、例えば下位の者が上位者に仕えらるか、無償のボランティア行為のような特定の意味合いが付いてきますが、英語の“service”は、社会的使命であるとか、(神への)献身、貢献というような宗教的ニュアンスを含む概念だといわれています。実際、戦前の日本で、米山梅吉氏に次いで 2 人目のガバナー(当時は日本全体で 1 地区)になった井坂孝氏は、ガバナー月信を初めて出した人としても知られていますが、その中でロータリーの理念を説くとき、“service”を必ず「サービス」と表記し、絶対に「奉仕」という言葉を使わなかったそうです。また、「奉仕」と並んで最も重要な用語の一つである「親睦」にしても、英語では“friendship”ではなく、“fellowship”であり、これは辞書によると「仲間であること」、「仲間意識」、「連帯感」などという意味で、少なくとも私たちが友人とゴルフをしたり、酒を酌み交したりというようなものとは異なる

るようです。このようにロータリーの用語は、一旦日本語に翻訳すると、翻訳した言葉自体がもともと持つ意味合いが重なり、異なったニュアンスで理解される可能性がありますから、あえて日本風に呼び替えるのではなく、そのまま英語のまま使用するのでしょうか。そうすることによって、本質を損なうことなくロータリーを理解することができるということだと思います。これを極論すれば、ロータリーの思想を正確に理解しようとする、英文の原典、原文を参照しなくてはならないということになるかもしれませんが、そのように本体の意味合いを大切にしようとする精神は常に持ち続ける必要があると思います。

さて、2016年の規定審議会は、例会のあり方、会員身分といったロータリーの根幹というべき部分に大きな変革をもたらしました。ジョン・ジャーム RI 会長はアトランタの国際大会で「我々は歴史的な時代へと歩みを進めようとしている。」と言われましたが、この言葉は今回の改正がロータリーにもたらした影響がいかに大きかったかを物語っています。今回の改正結果を聞いて、日本では、これまで大切にしてきたロータリーの価値観が損なわれたとか、さらにはロータリーそのものが変わってしまったと慨嘆する会員が少なくないのですが、他方で、国際標準のロータリーと日本のロータリー思想との違いを指摘し、この乖離が今後ますます拡大し、日本のロータリーが「ガラパゴス化」していくのではないかと懸念する声もあります。

私は、ロータリー思想は、職業人にとって有用無比の人生哲学であり、常に自らの行動の規範とすべきものと考えています。それを最も具体化したのが、「社会奉仕に関する 1923 年の声明」(いわゆる「決議 23 - 34」)であり、「四つのテスト」でしょう。例会のあり方に「柔軟性」が認められ、ロータリーの「外形」がいかに変わろうとも、これらの文献に示されている思想は、私たちが職業人として持つべき倫理観、価値観の根源に迫るものであり、普遍性を持ち、それ自体揺るぎないものであるはずで、日本においては、ロータリーがもたらされて以来、多くの先達が、各種文献の原典、原文を参照、研究し、ロータリーの本質やその思想を解き明かしてきましたが、とりわけ当地区には深川純一パストガバナーをはじめ、多数の優秀な指導者がいらっしゃることは幸せなことだと思います。私たちは、このような先達が築き上げてきたロータリー哲学とでもいうべきものに魅了され、その思想を学びたくてロータリーの門をたたき、それを誇りにしてきたのではないのでしょうか。

今、ロータリーのいくつかの規則が変更され、「外形」としてのロータリーが変わろうとしているとき、世界的レベルでいえば、日本のロータリーの考え方が仮に少数派になろうとも、私たちは堂々と論陣を張り、その信ずるところを世界中のロータリアンに説き続けるべきではないでしょうか。その意味で、今回の IM のエッセンスを詰め込んだこの報告書は、私たちの今後のロータリー生活にとって重要な位置を占めることになるでしょう。

はじめに

西播第二グループガバナー補佐 久保 泰造

「ロータリーとは何だろう」と問われたとき、私はロータリーとは「人間が人間としていかに生きるべきか」、その「思想の体系」であると思っております。つまり人が人としていかに生きるべきか、それが問われているのがロータリーではなからうかと考えます。この「思想の体系」、それは100年以上かかって築き上げられてきた人間社会における普遍の原理であって、時代に応じて変化するものではないだろうと思います。しかし近年 RI においてもそれぞれのクラブにおいてもロータリーが大きく変容したのではないかとということが強く感じられ、そのことがこの「思想の体系」に揺らぎを及ぼさないかと懸念されます。

今や RI はロータリーの哲学を語るより、財団を支えるためにも受け取られかねないクラブ運営に関心が強いようにも見受けます。近年は RI が多民族の受け皿であるということが色濃く表れ、多数決に支配され、プリンシプルから遠ざかってしまったのではなからうかという気がしております。それを象徴するものが今年の規定審議会の決定ではなからうかと考えます。一見尤もらしく聞こえる柔軟性という名のもとに RI はその原理性を喪失してしまったのではなからうかとさえ思われます。

一方個々のクラブに目を転じるとき、あるクラブでは会員増強は数の増強ばかりに目を奪われ、質の議論が忘れ去られ、会員選考が形骸化してしまったのではないかという声を耳にいたします。その結果はロータリーを学ぶ意欲の乏しい会員が増え、感性的親睦が親睦の全てであるかの如く考えている会員が多くなったのではないかと言われております。また、かつてはロータリアンに問われていたノブレス・オブリージュをロータリーの場で語ることは今では場違いな感じがするようになってしまったという声も聞かれます。このように会員の質が問われるようになってきますと、当然の帰結として例会の質も問われるようになってきました。このような中で「ロータリーの例会は人生の道場である」というあの先人の言葉はまだ生きているのでしょうか。

このような今私たちはロータリーの今日の危機を感じ取り、そこから私たちはどう行動すべきかということを考えなければならないだろうと思います。このことを西播第二グループの皆さんに問いかけてみたいというのがこの度の IM の趣旨でした。合わせ IM の在り方を考えるべきと思いました。このような意図からテーマを「“ロータリー”原点への回帰」とさせていただきます。

お二人のバスターガバナーは私たちにこの度のテーマに対するその解を与えてくださいました。合わせお二人は私たち西播第二グループの会員のみならず多くのロータリアンに「ロータリーの夢と哲学」を語ってくださいました。そして西播第二グループの会員の皆さま方にはこの度の IM の感想を寄せていただき有難うございました。

この記録誌は「ロータリーの教科書」として多くのロータリアンにお読みいただければ有難いと思い編集させていただきました。

西播第2グループIM

ロータリーの夢と哲学～21世紀のロータリー～

国際ロータリー第2680地区パストガバナー 久野 薫 (神戸東)

西播第2グループの皆さんこんにちは。本日は当グループのIMにお招きいただきまして大変光栄に思っております。本日の講演は、今年度が始まる前から既に、私の敬愛する久保泰造ガバナー補佐から直接ご依頼を受けておりました。大役を無事果たせるか一抹の不安はありますが、私のロータリーライフの集大成を兼ねてお話しさせていただきたいと思っております。

序にかえて ～変質するロータリー～

112年という歳月を重ねてきたロータリーは、今、変質しようとしております。否、すでに変質したというべきかもしれません。変質するということは本質を失って、違う組織になってしまうということでございます。私が考えるロータリーの本質というのは“職業奉仕を中心に据えた、奉仕の理念の実践”ということでございます。これが失われてきていると思っているのです。一体いつの頃からか、と尋ねられても特定できませんが、1980～1990年頃から徐々に進行し、今日顕在化したと言うべきでしょうか。私の神戸東RC入会が1988年ですから、私は本当の意味でのロータリーの雰囲気は知らないのだと思います。“凜とした雰囲気”が、例会から消え、楽しい楽しいだけの例会になってしまいました。今のロータリークラブは、ロータリーを核としたものではなく、ゴルフあるいはその他の同好会を核とした楽しみクラブになってしまった感があります。

RI理事会に設けられているいくつかの委員会の中の職業奉仕委員会が1947年廃止され40年後の1987年に復活しましたが、1989年「ロータリアンの職業宣言」を制定しただけで、すぐにまた消滅しました。また、2000年というのは、“奉仕の理念”を育むための

制度の中核（限定会員制度、例会出席の重視、職業奉仕の アイデアの交換）

に、相次ぐ規制緩和が加えられ始めた時期であります。奉仕哲学の追求より奉仕活動の実践が重視され、例会はもはや「人生の道場」ではなくなりました。例会では、会員におもねて、ほとんど教育的な話は影をひそめてしまっております。そのためか、ロータリーと真剣に向き合おうとする会員は減少し、ロータリーを趣味とする、ロータリー三昧の虚飾のロータリアンが、我が物顔にのし歩く現状であります。良質な会員は、黙して語らずか、嫌気して辞めていく、悪循環が起り始めているのです。

量子論において、量子の性質を説明するのに引き合いに出される表現に

“誰も見ていない月は存在しない
月は人が見た時初めて存在する”

というのがあります。これは量子というミクロの世界だけではなく、われわれ日常のマクロの世界にも通じます。“心そこにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞こえず”であります。そこで、ロータリーと正面から向き合い、ロータリーについて語り、考えてみようというのが本日のIMの本意なのです。

今年度、当グループのIMテーマは「“ロータリー”原点への回帰」であります。馬車を主要交通手段とした時代から、宇宙旅行も夢ではない今日まで、1世紀以上を経過しています。時計の針を逆戻しした原点では勿論ありません。原点としてロータリーの神髄を何に求めるかを問うているのです。そこで、

“愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ”

と申します。歴史と言っても、単に出来事の羅列ではなく、歴史をつき動かしている背景に思いをいたし、現状を分析して、過去と照合し、未来を展望してみたいと思います。そんなわけで、まず現状分析から初めてみたいと思います。

1. ロータリー第4の危機？ ～会員数の減少と変質～

2011～12年度RI会長、カルヤン・パネルジー氏は「ロータリーは今重大な危機に面しているロータリアンがどんどん減っている。彼らは一体何に不満でロータリーを去っていくのか？」

と疑問を投げかけました。ロータリーは、今や、かつてのロータリーではありません。今では、アメリカの指導者層のロータリアンは、“奉仕の理念”や、その誕生の歴史的流れなどに対する関心は極めて低く、シェルドンの名前さえ知らない外国のロータリアンは珍しくないとされます。したがってロータリーが“奉仕の理念”を育む、人材育成のための団体だと定義づける人はほとんどいなくなって、ボランティアをするための団体の一つと考える人が大多数を占めるようになってきているのです。世界一のNPO法人を、志向しているのです。

つまりは、過去に学んでいないということであり、過去がそうであったということ自体を知らないのではありませんか。眼前にあるロータリーは、かつてのロータリーとは分断された、別のロータリーであり、ごく一部の人のみが、かつてのロータリーの影をたたくて在籍しているといった構図が思い浮かぶのです。

シェルドンの職業奉仕哲学は過去の遺物にすぎず、「欲望という名の電車」で突っ走る職業人を、もはや、人の良心や哲学のみで規制することは出来なくなっているのです。そこにあるのは、モラル無き資本主義であり、論理の国アメリカにおける、ロータリーの行き詰まりであります。

この度の第4の危機の一因は、会員減少がもたらす危機であります。ロータリーの存亡をかけた深刻な危機であります。2002年から、世界のロータリアン数は120万前後で推移し増加がみられません。先進国での会員減少、後進国での会員増強から来る、ロータリーの地殻変動であります。この傾向は世界の人口動態から見て2050年以降、より深刻なものになります。アフリカにおける人口爆発、貧困の悪循環、民族紛争は最後まで取り残された世界の課題となります。そのためか、2018～19年度RI会長はウガンダ出身のサミュエル・オオリー氏が指名されていましたが急逝されたので、急遽バハマ国のバリー・ラシン氏に変更されました。彼はどんなRI会長テーマを掲げ、ロータリーに何を求めるのでしょうか。

話は少し横道にそれますが、会員増強に妙手はあるのか？について考えてみましょう。会員増強は勧誘(recruit) 維持(retention) 再活性(revitalize) 拡大(extention)の E+3R しか方法はありません。2012年 RI は、毎年3%の会員増強計画を立て、2015年までに、世界の会員数130万人達成を目指しました。そしてその妙手として採ったのが 若年層、女性層、配偶者、家族、ローターファミリーを対象として勧誘 年会費、例会開催時間の見直し E-クラブの拡大 いわゆる SAKUJI 作戦でありました。結果、成功したのかどうかは、事実が証明しております。妙手というのは存在しないのです。人口動態のように抜き差しならない原因はありますが、致命的なことはロータリーに魅力、メリットを感じなくなっているということではありませんか。

近年 RI はゾーン単位で、会員増強の妙手を求めて「戦略計画推進セミナー」なるものを開催しています。召集される各地区の役員は、ガバナー、エレクト、ノミニ はじめ、戦略委員会、会員増強委員会、広報委員会各委員長に加えて、誰あろう財団委員会委員長であります。財団事業の成果を広報することで、会員増強を図ろうということであります。一体妙手となりうるのでしょうか、疑問なしとはしないのです。かつて昔は会員増強委員会と職業奉仕委員会合同のセミナーが施行されていたことと比べると、RI の意図するところには彼我の違いがあります。

先進国での会員減少の元凶は、アメリカと日本にあります。アメリカでは1994年の421,823人をピークに、現在、その約20%が減少、日本では1997年の131,731人をピークに、現在、その約30%が減少しております。

これまでの世界の会員増加曲線は、S字状を描いています。これは会員数が飽和状態にあることを意味します。会員の自己増殖の限界であります。今後一定の Lag time を置いて、再びS字状を描いて、増加するか、減少するかで、ロータリーの命運が決まるのです。ロータリー大国を自認する日米両国のロータリー運動に陰りが出てきていることは大きな問題で、今日の第4の危機をより深刻なものにしているのです。

会員数減少の原因は、勿論、日米で必ずしも同じではありません。米国では、かつてはアングロサクソン民族によって占められていた白人中心の共和国は、今や黒人、ヒスパニックの大量移民によって、人口4億人の民族モザイクの共和国に変わって行こうとしています。ロータリーに期待するものは自ずから変わってきているのではないのでしょうか。かつては五大湖周辺に広がった、大工業地帯は、今やラストベルトとよばれ、poor white を象徴しています。これらは米国における会員数減少と無縁ではなさそうです。

世界一のNPO法人を目指すロータリーにとっては、会員数の減少は、致命的なのです。TRF を通じた成果によって、世界にアピールしようとするロータリーにとっては、財政的基盤を揺るがす大問題であります。

わが国の事情は少し違います。決して TRF 云々の危機感ではありません。勿論、少子高齢社会の人口動態はわが国の会員数減少の根源的原因ではありますが、1990年以降、RIが奉仕哲学の追求より、奉仕活動の実践を重視するようになった、RIの方針転換に対する危機感であります。人づくり組織からNPO法人化したRIへの危機感なのです。

わが国の会員数の動向を申し上げるならば、2007年、会員数は10万人を切ってインドに次ぐ第3位の会員数になりました。2014年に9万人を切り、現在89,000人前後で推移しています。このままですと、人口動態も考え合わせると、2050年には6万人台になってしまいます。

会員増強、拡大は喫緊の課題となり、為に2010年以後、やみくもに増強を図ったつけが今回ってきているように思われます。ロータリーの何たるかを知らずに入会すると、入会后とのギャップで、ロータリー離れの原因にも、クラブの弱体化にもつながります。
このことは既に、

1924～25年度RI会長エベレット・ヒル氏が「今までロータリーという団体の真の目的を知らずに入会する人が多くいました。ロータリーの知識に乏しい人を会員に迎えたクラブは、結果的に弱くなっています」と語られました。「会員増強に関しては、会員の勧誘と維持そのものを目的とするのではなく、ロータリーとは一体どんな団体かを理解することから始めなければならない」

とも言われ続けられてきているのです。それらの警告は無視されてしまったのです。

そのためか今の日本のロータリアンは、奉仕哲学の追求に熱心でもなく、かと言って奉仕活動の実践に熱心なのではなく、財団には適当に寄付して、奉仕の免罪符とし、RIの動向には無関心であります。ことロータリーに関しては無関心、無感動、無責任、無気力であります。そしてクラブ自治権と称して何もしない自治権を振り回し、ますますRIから遠ざかってきております。RIから提示される、DLP、CLPに正面から向き合う姿勢は希薄であります。これで日本のロータリーはRIから益々乖離して行っております。

1983～84年度RI会長、ウィリアム・スケルトン氏は

「ロータリアンにとっての最悪の罪は、憎しみでも何でもない、同じロータリアンのすることに無関心であることである」(1983～84年度RI会長、ウィリアム・スケルトン)

と言っています。その最悪の罪を我々は今、犯し始めているのです。現在の日本人ロータリアンの特徴は

自己を主張せず、クラブ単位で物事を考え、行動する

クラブ間、グループ間、地区間のネットワークづくりに消極的、ひいては世界のロータリアンの意識はない。クラブ会員数の減少は、合併より、脱会につながっていく

原理主義、教条主義のため、奉仕哲学の解明には興味を示すが、チャリティ、ボランティア活動は身についていない

退会者への配慮に欠け、脱会クラブへの追跡調査もしない

かくして西洋では抵抗なく受け入れられているように見える、今日のボランティア活動団体、人道的奉仕団体も、日本人にとっては居心地の悪いロータリーになってしまっているのです。ロータリーに在籍

する唯一ともいべき理由は、誤った選民意識、親睦と商売上の相互扶助だけであります。それも多くの場合、双利共生ではなく、片利共生であります。ロータリーにおける禁じ手「事業または専門職上の関係において、普通に得られない便宜ないし特典を同輩ロータリアンに求めない」は、後述する 2014～15 年度 RI 会長ラビンドラン氏の提案を俟つまでもなく、既に踏みにじられているのです。

ロータリーは、この度の第 4 の危機を迎えるまでにも、第 1、第 2、第 3 の危機を経験してきました。すべての始まりは、シカゴ RC の誕生であります。

2. すべてのことの始まり ～ シカゴ RC は何故生まれたのか？～

「西部の都市シカゴの、そのよこしまで落ち着きのなさが何故か奇妙な魅力となつてとりついた」ポール・ハリスという名の一人の弁護士が、「友情とビジネスを結び付け、それによって事業も栄え、友情も深めることができるのではないか」というアイデアを基に、わずか 4 名の優良な職業人と語らって 1905 年にシカゴ RC は誕生しました。当初は、商売上のうまみを求めて会員が集まってきたのです。しかし、いかに良質とはいえ会員同士の不正な取引もあって

「商取引にあって、ロータリアンという言葉は純金と同意義でなければならない」

という職業奉仕の萌芽を生むことになったのです。これは当時、会員の多くを占めていたイギリスのプロテスタントの一派、ピューリタンの「プロテスタントの倫理」が、資本主義の精神、やがてはロータリーの職業奉仕と結びついていくことになるのです。

ロータリーの「職業奉仕哲学」は、1910 年(シカゴ大会)の A.F. シェルドンのモットー、1911 年(ポートランド大会)の B.F. コリンズのモットーの発表によって明文化されました。それは

**“最もよく奉仕する者、最も多く報われる”(シェルドンのモットー)、
“超我の奉仕”(コリンズのモットー)**

であります。実は、この 2 つのモットーは、同根のもので、互いにハイフォンで結ばれ、

“超我の奉仕 最も奉仕する者、最も多く報われる”

と表現されるべきものなのです。そしてこれは表現を変えた**黄金律**であります。黄金律とは「己の欲するところ、人に施せ」であります。

シェルドンのモットーは、1902 年から彼が経営する販売学のシェルドンスクールにおいて、因果律によって導き出された、ビジネスの科学でありました。これが日本人の心酔するところになりました。なぜならば、古来わが国で伝えられてきた、石田梅岩の石門心学、「奪うに益なし、与うるに益あり」の二宮尊徳の推譲の理論、近江商人の三方よしの考え方と、相通じるものとして日本人は考えたからです。

時を経て戦後の 1955 年、ロータリーを最も知る男、1910 年から 1942 年まで 32 年間 RI 事務総長を務めたテスリー R・ペリーが、ロータリー創立 50 周年を回顧して BIRTH of AN IDEA と題して

講演しております。(講演内容は1980年5月号、2001年10月号の『ロータリーの友』誌上に掲載されております)

彼の講演内容で私が注目するところは、次の2点

「“奉仕の理想”は全ての主だった宗教にみられる言葉を変えた黄金律であり、その重要性を全ての人達に解ってもらうのがロータリーの目的なのです。これが崇高なロータリー運動の目的なのです。目的はこのように簡明なのです」

「20世紀半ばはなんと不幸で恐ろしい世界でありましょうか。“奉仕の理想”を受け入れ実践しているロータリアンがそれを放棄したのではなくそれに耳を貸そうとする人々があまりにも、少ないからであります」

であります。アメリカでは1955年にして早くも、資本主義の資本の原理が生み出す、巨大資本の前に、職業奉仕が重要視されなくなっていく今後を予感させているのです。

3. “奉仕の理念”実践の1丁目1番地 ～ 職業奉仕観の変遷～

「ロータリーの目的」(従来の“綱領”)の第2項に、“ロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること”と規定されています。それに従って、“職業奉仕”の定義は、職業を通じた社会への奉仕とされます。しかるに、戦後、職業を通じた社会への奉仕の解釈に東西の温度差があります。われわれの考える、“職業を通じた社会への奉仕”とは、職業を営む行為の中に、“奉仕の理念”を実践することであり、職業を離れた所に職業奉仕はないと考えるのですが、

RIはCode Of Conductに見るように、単に職業上のスキルを利用した社会奉仕と考えるのです。

そこには、哲学は不要であります。だから「奉仕の理念の習得には、就労経験の有無とは関係がない」という認識がRIで蔓延しているのです。

現在のRI理事の中にもそう言ってはばからない理事も少なくないのです。

「On Board」(理事会にて)と題して、the rotarian、2016年4月号 ロータリーの友、2016年4月号に

「自分の義理の姉は、学歴があって、家庭を持ち、地域社会で積極的に活動しているが、就労が条件となると、ロータリーには入会できない」とカナダ出身のRI理事ジェニファー・ジョーンズが語ったところ、他の2名の女性の理事も「そうした規定は、ロータリーにおける永きにわたる性差別問題を助長するだけ」と同意を示した。

という意味の記事が掲載されております。皆さんが何気なく読み過ごされたこの記事に、私は強い違和感を覚えるのです。私にとって驚きであります。こんなわけだから2013年規定審議会は専業主婦の会員資格を認定することになったのです。これは、職業を離れて職業奉仕は存在しないとする、日本の職業奉仕観の

「ガラバゴス化」

という人もあります。この言葉は、2006～7年頃から、わが国で使われ始めた、ビジネス用語であります。国際的な標準から、かけ離れた状態を意味します。しかしむしろ日本の職業奉仕観こそが標準であるべきと我々は考えているのです。職業奉仕哲学の軽視は、今日の第4の危機の一因をなしているのです。

因みに5項目からなる「ロータリアンの行動規範」の5番目の条項

「事業または専門職上の関係において、普通には得られない便宜、または特典を同輩ロータリーに求めない」

を、2014年4月のRI理事会において、当時まだRI会長エレクトであったスリランカ出身のラビンドラン氏の提唱で、会員増強の一助として、“ロータリアンに特典を”の意図からでしょうか、削除してしまったのです。さらに、彼はRI会長として、2015年7月から「Rotary Global Rewards」というロータリアン特典策を始めたのです。これらは、見識あるロータリアンの聲をかう結果となっているのです。

RIは会長以下、19名の理事によって方向付けが行われています。さらに、2016年規定審議会決議で「RI会長は、全世界のロータリアンにとって前向きかつ意欲を引き出すリーダーとなる」(RI細則第6条)と位置付けされております。然し、以上例を挙げて示しました通り、RI理事会と雖も、私達日本のロータリアンの代弁者では決してないのです。RIと我々の思惑が乖離して行くことは、“むべなるかな”であります。

4. RCの危機の回避 ～ RIは何故生まれたのか？～

ロータリーは今日まで、幾度となく危機を迎え、その都度、克服してきた歴史を持ちます。

第1の危機;1906～1910年の「親睦か奉仕か」の論争

奉仕と言っても職業奉仕は、受益者が職業人自らであるため、さしたる抵抗もなく受け入れられましたが、親睦と相互扶助、心のオアシスを大命題とするシカゴRCの中に、社会奉仕の概念を導入することは、草創期には大きな抵抗があったのです。

1906年ドナルド・カーターが、シカゴRCに社会奉仕の必要性を提唱し、ポール・ハリスもこれに賛同したことが、クラブ内に思わぬ大波紋を呼び、「親睦か、奉仕か」の争いで、クラブ崩壊の危機を迎えることになったのです。シカゴ市役所や、図書館に公衆トイレを寄贈するという、まことにささやかな社会奉仕プログラムが、シカゴRCの存亡をかけた、対立の火種になるうとは、彼らの親睦、友愛への思いの強さを思い知らされるのです。

これこそがロータリー第1の危機であったのです。この危機を解決したのは、クラブ連合体という、別組織を作って、クラブに親睦のエネルギーを温存させたことであります。

今後再び、RCの親睦のエネルギーを削いで、危機を迎えることがないように、全米ロータリークラブ

連合会(1910)、国際ロータリークラブ連合会(1912)を経て、1922年、RIというロータリークラブの連合体を作る必要があったのです。ここでRCはRIに

奉仕哲学の解明 ロータリーの拡大 情報媒介

の3つの機能を委託して、RIという別組織を作ったのです。その代わり、クラブは、RIの定款、細則、クラブ定款を遵守するという契約を結んだ訳であります。クラブ自治権はRI定款、細則、クラブ定款に違反しない範囲で認められます。これがRCに許された自治権であり、自由度の範囲であります。これまでクラブの自治権は

クラブ定款第13条、第1節、管理主体

に唯一、明文化されておりましたが、この度の2016年規定審議会によって、会員資格、例会開催、出席義務、クラブ年会費に関する、各クラブ細則条項上にクラブ毎の自治権内容が明文化されることとなります。ここに各クラブの個性が表出されることとなります。

この危機の後、1910年、ポール・ハリスは「Rational Rotarianism」の論文の中で「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と大悟し、寛容の重要性を説いております。この意味で1910年が「ロータリーの思想の原点」と考えることが出来ます。“寛容”がロータリーの思想の原点なのです。

ここで私たちが注目すべきは、寛容は東洋思想の属性であることです。以後ロータリーは、非寛容 Logical な西洋思想の頭に、寛容 Ecological な東洋思想をいただき、ねじれた状況で歴史を刻むことになるのです。以後のロータリーの歴史は、物質文明、西洋思想と精神文明、東洋思想のせめぎ合いの歴史であったように私は思います。

第2の危機;1919~1923年の「国際身体障害児協会」支援を巡る「親睦か社会奉仕か」、「職業奉仕か社会奉仕か」の論争

第2の危機も社会奉仕導入を巡るものでした。エリリアRCのエドガーD.アレンが1919年「国際身体障害児協会」(後のイースターシールズ)を設立して、ロータリーに支援を求めたことに始まります。「職業奉仕か社会奉仕か」のロータリーを二分する大論争は、1923年のセントルイス宣言で解決を見るのです。世にいう「決議23-34号」であります。これによって個人奉仕、単年度奉仕を原則としながらも、奉仕活動の訓練の場として例外的に団体、継年奉仕も認められたのです。

この身体障害児救済事業は1929年ダラス世界大会で、再度、支援が決議され、同大会でシェルドンの標語の、否決されたとはいえ、廃止案が提出されたこと、1930年にはポール・ハリスが同協会に、未だ低迷するTRFから500ドルを寄付して支持を表明した事で仲たがいをしたのでしょうか、シェルドンは1930年にRCを去ることになるのです。シェルドン退会は一時、シカゴRCに会員数減少をもたらしたと伝えられます。

第3の危機;1929~1950年の世界大恐慌から第2次世界大戦までの、外的要因による会員減少

ところが、この時期ロータリー自体の在り方に？が付けられました。イギリスの評論家、ギルバートK・チェスタートンは、19世紀後半のビクトリア時代後期の、物質主義と自己満足を著書『This Victorian

Age』で批判し、20 世紀初頭のこれに類した思潮にも、『This Rotarian Age』と題して、痛烈に批判しました。彼はロータリーの世界的発展に対して人間知性の墮落と批判しました。当時のシカゴ RC 会長ジョージ・ハーガ は徹底的にシカゴ RC を分析して 1934 年批判的な『Rotary?』を出版、その影響か、ポー・ハリスは 1934 年の自著『This Rotarian Age』(ロータリー理想と友愛、米山梅吉訳)の発刊を遅らせたと伝えられます。1905 年創立され、4 半世紀のうちに基礎固めが出来上がったかに見えたロータリーではありましたが、早くも限定会員制度をはじめ、制度疲労のきしみを覆い隠すことが出来なっていくのです。

第 2 次世界大戦が終結しても、世界平和は訪れませんでした。資本主義と社会主義の、米ソ冷戦時代の到来であります。1960 年代は、キューバ危機、ベトナム戦争などの局地戦争は絶えませんでしたし、今でも中東、アフリカでは、宗教間、民族間対立で紛争がやむことはありません。世界平和を究極の目的にして、112 年の歴史を歩んできたロータリーの未だ道遠く、果しえぬ夢であります。1969 年アポロ 11 号が月面上陸を達成し、月からの地球を見て、地上での戦争のむなしさを実感したと伝えられます。

1960 年代は、ロータリーでは、インターアクト、ローターアクト、RYLA、青少年交換事業等次世代を担う青少年の育成が盛んになっております。若者育成を通じた、世界平和への希求であります。1965 年には若者の異文化交流事業 GSE も開始されました。アインシュタインの言葉を俟つまでもなく「世界平和は力に依って達成、維持は出来ない、お互いを知り合うことが、遠回りに見えて近道なのです」。

5. ロータリーの理念、目的、目標

RI は法人組織であります。すべからく組織には、理念、目的、目標があるように、RI にもあります。あらためてロータリーの理念、目的、目標を考えますと、その理念は「奉仕の理念」(Ideal of Service)であり、その意味するところは、「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針」「決議 23-34 号」第 1 項に

「ロータリーは基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕-「超我の奉仕」の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」という実践原理に基づくものである。

と要約されています。

“他者のことを思いやり、他者のために尽くす”(Thoughtfulness and Helpfulness)

と言い換えることが出来ます。究極の利他であり、言葉を変えた黄金律であります。

ロータリーの“目的”の意味するところは、いわゆる“ロータリーの目的”の前文に記載されています。

主文は

「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を推奨し、これを育むことにある。具体

的には、次の各項を奨励することにある」と続きます。次の4項を一体化して表現すれば、身の回り万般に亘って、奨励し、育むこと

となるのです。

前文を“奉仕の理念を意義ある事業の基礎とすべし”と翻訳すれば、職業奉仕こそがロータリーの目的と解釈されるのです。しかし、西洋では、職業奉仕は他の奉仕部門と同列のもので、奉仕の理念を適用すべき、一部門にすぎないと考えられています。われわれ日本のロータリアンは、5大奉仕部門の中でも、とりわけ職業奉仕において実践しようとする組織がロータリーと考えているのです。職業奉仕に対する抜きがい東西の温度差であります。

6. RIの実戦部隊 ～TRFは何故生まれたのか？～

TRFは何故生まれてきたのでしょうか。RIは奉仕哲学の解明のために、その哲学と実践原理を提唱することはあっても、実践に移す組織ではありません。したがってRIの方針に従ってこれを実現するための事業を行う組織が必要であります。

その組織として生まれたのがTRFであります。時に1917年のことであります。RIが親睦か奉仕かで激しく揺れ動いている時期、第1次世界大戦の最中、いくら平和への希求とはいえ、時期尚早であったのです。これはロータリー大好き人間、何事においても、基金を以って緊急時に備えるという、TRF創設者アーチ・クランプの人となり、ポリシーのなせる業だったのです。案の定、30年間寄付金が思うように集まらず、開店休業、1939年には解散の危機に見舞われたのです。唯一の支援者はポール・ハリスだったと言われます。その時いたどんぐりの実が、今日のりっぱな榎の木に育つことになったのは、ロータリーマジックの一つと言えるかもしれません。

ところが今ではTRFなしにRIは語れなくなりました。ましてや、2017年はTRF創設100周年ですから、TRF一色に染まっているのです。

TRFには設立当初から、明らかにされるべき、三つの課題がありました。

RIとTRFの関係 TRFの使命の限界 寄付金推進策

TRFは1917年、「国際理解、親善のために、世界で良いことをするための基金をつくろう」という、当時の国際ロータリークラブ連合会会長、アーチC・クランプの呼びかけで創設されました。しかし、寄付金を集めたり、それを管理、運用する任務は、本来RIに委託された仕事ではありませんから、必然的にRIから独立することになります。1928年RIから独立して、正式名TRF(国際ロータリーのロータリー財団)となりました。1931年教育、人道的事業に特化した信託組織となりました。そして1983年、創設66年も経って、非営利の財団法人となったのです。何故こんなに法人化が遅れたのでしょうか。因みに1952年創設された米山基金はわずか15年後の1967年に法人化されております。それだけTRFの活動は長く不活発であったということでしょうか。

TRFのモットーは「世界で良いことをしよう」(Doing good in the world)、使命は「ロータリアン

が健康状態を改善し、教育への支援を高め、貧困からの救済を通じて、世界理解、親善、平和を推進する」(2007年)であります。

TRFの法人化にともなって、「国際ロータリーのロータリー財団法人設立定款」と「国際ロータリーのロータリー財団細則」が制定され、RIとTRFの関係は明確化されました。

それによりますと、TRFはRIの方針に基づいて、教育的、人道的プログラムを実践する慈善事業組織と定義づけることが出来ます。あくまでRIのTRFであり、RIの下部組織であります。しかしRIは社団法人、TRFは財団法人で、組織の上では、別組織、人事、財務の上ではずばずばの関係にあるのです。

TRF使命の限界の有無に関しては、RIの理念、目的の実現のための目標の一つとしてのTRFです。おのずからRIの理念、目的、つまりは、職業奉仕を中心に据えた“奉仕の理念”を忘れてはいけません。“世界に良いこと”は沢山あります。だからと言って、良いことは何でもやるということは「奉仕の百貨店」になってしまって、RIの分度を逸脱しているのです。しかし、現実には、TRFの目的が自己目的化して、際限なき国際的人道的奉仕活動が広がっているのです。「仁」に過ぎれば組織は弱くなるのです、「奉仕の理念」に過ぎれば、ロータリーは弱体化するのです。さらに私見を述べればTRF事業は本来、教育事業のみに信託すべきであって、WCS事業はRIの分度を超えた事業ではなかったのかという思いが私にはあるのです。

寄付金集めに関しては、1945年TRFが免税団体に指定されたことは何にもまして追い風となっています。それに加えて、TRFは人間の射幸心に訴えかけた、数多くの認証制度が功を奏して、年間2億5000万ドルの寄付を集めるに至っております。1957年ポールハリスフェロー制度の導入に始まり、1999年遺贈友の会、2000年前後に大口寄付(レベル1~4, 10万ドル)、アーチクランフササエティー(レベル6まで約10億円)、ポールハリスササエティーがあずかって力があつたと思います。また、論功行賞は世の常です。認証人事も当然のことのようにまかり通っているのです。

唯、TRFの認証人事を、RIの人事に持ち込んではいけません。これがロータリーの矜持というものです。金が支配するロータリーになってしまえば、ロータリーは空洞化するのです。心の匂いならず、金の匂いしかなくなってしまうのです。

ポール・ハリスの死後、1947年「ポール・ハリス記念基金」が設立され、この基金をもとに、「国際親善奨学金制度」が発足し、財団事業は教育事業中心に本格化しました。しかし、この教育事業重視の財団活動の流れは、1962年RI理事会が「世界社会奉仕」(WCS)を導入したことで一変したのです。WCSという国際的人道的奉仕活動が教育事業を凌駕するようになったのです。先に述べた通り、TRF本来の事業、教育事業を、分度を超えたWCS事業に踏み出しことになるわけです。

WCSはRI理事会の「一部地域の貧困は全体の豊かさを危うくすると認識し、あらゆる国の生活水準を高めようとする活動を支援すべきである」という考えに基づくものであります。

1968~69年度RI理事会の定義によりますと

「WCSとは、低開発国のクラブあるいは地区が、自国の生活水準向上のための、人道的奉仕活動を立案実施するにあたって、先進国の地区あるいはクラブが援助の手を差し伸べ、もって生活水準の向上、および、両国の相互理解親善を推進する」

ということであり、世界における社会奉仕活動で、地域における社会奉仕活動の延長にすぎないという主張であります。この考え方の底流にある思想は、グローバリズムに基づく世界観であります。しかしアメリカンスタンダードにつながって、アメリカ極集中に結びついていると思われます。

RIは創立後100年を経過しても、認知度低迷に直面しています。会員数も減少し始めました。RIはこれまでの方針転換を迫られたのです。

2010年RIは今後の戦略計画として、3つの優先事項を提示しました。更には、2014年10月にもRI理事会決定で、4つ目の優先事項が追加されました。すべての道を、TRF支援に通したのです。4つの優先事項とは、

1. クラブのサポートと強化
2. 人道的奉仕の重点化と増加
3. 公共イメージと認知度の向上
4. 財政的継続性と運用有効性の向上

であります。一方、TRFは2013年からは「新しい補助金制度」を提案し、補助金の運用方法に大幅な改正が加えられ、かつてのWCSは、今では人道的プログラムと呼ばれ、1991～92年度から導入されているシェアシステムによる資金援助を受けて、世界の6つの重点分野に特化した大規模事業を展開する方針を採ったのです。6つの重点分野とは

世界の6つの重点分野

平和と紛争予防 / 紛争解決

疾病予防と治療

水と衛生

母子の健康

基本的教育と識字率向上

経済と地域社会の発展

2016～17年度、RI会長ジョン・ジャーム氏は、RIと財団が融合した戦略計画で成果を上げ、徹底した成果主義、持続性のある成果、計測可能な成果でRIのアイデンティティーを一挙に確立するという、起死回生、9回裏、逆転満塁ホームランを狙ったのです。これは論理的、数理的、合理的西洋思想の産物であります。

（“Whatever Rotary may mean to us, to the world, it is known by results it achieves.”）

私が思うに、たとえ6つの重点分野に特化した大規模人道的奉仕活動を展開しても、従来とさして効果は変わらないと思います。もしRIが、TRFが本当に起死回生のホームランを狙うならば、今や撲滅までfinal inchを迎えた、ポリオプラスプログラムの成功に学ぶ必要があります。6つと言わず、一点豪華主義、たった1つのプログラムに、集中すべきだと思います。

それはおそらく

ポスト-ポリオプラスプログラムは世界平和への支援

だと思います。これは既に始まっています。1997年6つの平和センター設置、2002年世界平和フェローシップ制度発足であります。この制度のために、恒久基金(1980年世界理解平和のための基金から1994年恒久基金に改称)へのメジャードナー寄付を推奨しているのです。目標は2025年までに恒久基金20億2500万ドルです。しかし世界平和達成のむずかしさは、勿論ポリオプラスの比ではありません。

RIの究極的目的は、世界平和であることを忘れてはなりません。職業奉仕で培われたロータリアンの高い精神性のすべては世界平和にこそ向けられるべきです。**それは世界のすべての人が等しく希求しない限り実現しないのです。**

2016年規定審議会で、RI提案として「RIの戦略計画委員会の委員を8名とし、うち4名はRI理事会により、4名は財団管理委員会により任命された、RIと財団の合同委員会とする」というRI理事会提案が採択されたのです。ここにRIとTRFが合同して、今後の長期計画を推進する方針をとったこととなります。

一連のこのような動きの意味するところは、RIと財団の融和どころか、「TRFのRI」になった感があります。心集めのロータリーは、お金集めの組織に変貌して、一人でも施主の多からんことを祈り、1円でもお布施の多からんことを祈り、次から次にお金をつぎ込まなければ事業を継続できない火の車から降りられなくなってしまっているのです。

今日のRIの口癖は、会員増強、TRFへの寄付なのです。TRFへの寄付増進のための会員増強と言っても、誰も反論できない、悲しい状況にあります。

7. 2016年規定審議会 ～RC自治権の拡大～

ロータリーは、会員減少からくる第4の危機に直面して、会員身分、例会開催頻度、出席義務、入会金に関して、クラブ自治権の拡大を認めました。クラブ定款に例外規定を設け、上位規定を下位規定で否定することができるという異例の措置をとったのです。職業分類表に関しては、既に1968年、RIの直接監督権を放棄し、クラブの自治権に委ねられています。

制度の中枢にかかわる部分のRI直接監督権放棄は、巨大化して多様化したRIを律するスタンダード、最大公約数を、もはや見いだせなくなったための、RI生き残りをかけた、自己防衛策だったと思われます。これはRIの弱体化、衰退への序曲であります。逆にRCの自由裁量権が拡大したこととなります。

もしそうならば、1915年RIが地区制を引いてクラブを直轄管理する体制から、各クラブをRIBIのような中間管理組織と認め、間接的管理制度に変換したという、それこそまさにRI創設以来の大変革ということになります。RIは日本ロータリークラブ連合会の結成を許してくれるでしょうか？

2016年の規定審議会で、会員の全般的な資格条件は、従来の

「本クラブは、善良な成人であって、職業上および(または)地域社会において良い世評を受けている者によって構成されるものとする」から

「本クラブは善良さ、高潔さ、リーダーシップを身を以って示し、職業上および(または)地域社会で良い評判を受けており、地域社会および(または)世界において奉仕する意欲のある成人によって構成されるものとする」

と変更されました。これによって、

**中核的価値観：
親睦、奉仕、高潔性、多様性、リーダーシップ**

を信条とする会員で構成する必要が明確にされ、肩書より、人柄、外見より中身が問われているのです。肩書頼みの、安易な選民意識はお呼びではないのです。と言っても、これも、建前です。本音は、若者、女性会員を増強するための規制緩和策の一環であります。中核的価値観は単なる言葉の上での、免罪符ではないでしょうか。

また、2001年頃からRI理事会により幾度となく実施されてきた、各種の試験的プロジェクトの結果が大きく規定審議会で採択される傾向があります。しかしホーソン効果という心理学的用語があります。

ホーソン効果(プラセボ効果の一部)

信頼を受けている医師などの期待に応えるために、患者が症状を正確に伝えなかったり、症状の改善があったかのような態度を、意識的や無意識的に行うこと。みられていること、期待されていることから来る心理的效果

必ずしも正しい結果を生むとは限らないのです。以って肝に銘ずべきであります。

2016年規定審議会は、多様化するロータリーに適応するために、RIの生き残りをかけて、人づくりロータリーと国際的人道的奉仕組織ロータリーの共存を許す形となりました。あたかもRIは2つの中心点を持つ楕円形を示すようです。ただし正楕円形ではなく、国際的人道的奉仕にシフトした、いびつな楕円形であります。生物学的に表現すれば、同種間雑種、レオポン状態にあるのです。一時的に生き延び、一応の存在理由を示し得ても、レオポンに繁殖能力はないのです。果して生き残りの道を開く結果になったのでしょうか。

8. ロータリーの夢と哲学 ～21世紀のロータリー～

時代は移り、世相は変わりました。一部では

Post Truthの時代

と囁かれています。この言葉は1992年頃英国で生まれた造語であります。「知に勝る情意」と言いますが、客観的事実の積み重ねだけでは判断されない時代を意味します。判断の根拠を与えるのは、人々の感情でしょうか。悪い意味での刹那主義、それをあおる、マスコミに主導されるポピュリズムの時代の為に、不確実、予測不能の時代であります。

こんな時代に、過去を分析して、未来のロータリーを予測できるでしょうか。

時代と共に、ロータリーも変わりました。奉仕の心を養う、人づくり組織から NPO 法人、慈善事業団体に変質したのです。もはやそこには、奉仕哲学はありません。必要がないのです。歴代の RI 会長テーマにも、この変質の過程をみる思いがします。

かつて、1960～61年度 RI 会長エド・マクロウリン氏は「You are Rotary. Live it. Express it. Expand it.」と語り、1974～75年度 RI 会長ウィリアム・ロビンスは「Renew the spirits of Rotary, by building men. Rotary's first job is to build men」と、人づくり組織ロータリーを謳いあげたのです。

しかるに、今年度、次年度の RI 会長テーマは

「人類に奉仕するロータリー」(ジョン・ジャーム氏)、「ロータリー:変化をもたらす」(イアン・ライズリー氏)

であります。人づくりの為に自分にも奉仕するロータリーではありません。自己にも変化をもたらすロータリーではないのです。この2つの RI 会長モットーは、私に謂わせれば、単なる RI の広報のための標語に過ぎません。ロータリー:に続く説明文にしか思えないのです。

こんな状況にあって人づくりロータリーへの回帰は、果たして可能でしょうか。RI 理事会挙げて職業奉仕が忘れ去られた今、それが可能でしょうか。

もし可能とするならば、回帰のカギは、ロータリー誕生の地、アメリカにあるのでしょうか？

今では、ロータリーは産みの親アメリカの手には負えなくなっています。ロータリーの目的は、古くから大切にしてきた道徳、欲望の自己制御と他者への奉仕の精神を、日常生活、なかんずく、職業生活において実践しようという組織であります。古今東西、大切にされてきた、黄金律の実践なのです。したがってこれは西洋思想の属性というよりは、東洋思想の属性だからです。隣人愛の実践か？利潤追求か？その転轍手としての役割を放棄したアメリカにとって、人づくりロータリーは手に負えなくなっています。人づくりロータリーへの回帰の鍵は、アメリカではなく、東洋、とりわけ日本にあると思うのです。1200年ごろから続いてきたアングロサクソン文明の時代は終わろうとしているのです。

西洋思想は論理的(logical)な世界であり、人間中心世界であり、自然は克服されるべきものであります。また、闘争的、破壊的、競争的です。一方、日本精神をはじめとする、東洋思想は、生態学的(ecological)、自然に跪く世界であります。そして、平穩、妥協的、協調的であります。そこに息づく精神は論理ではなく、情緒であります。

日本には世界に誇る“日本精神”があります。これがどんなにすばらしいかは、大正末期から、昭和

の初めにかけて、駐日フランス大使を務めた、詩人ポール・クローデルが、第 2 次世界大戦が帰趨を決した、昭和 18 年(1943 年)にパリで語った「日本人は貧しい。しかし高貴だ。世界でどうしても、生き残ってほしい民族を挙げるとしたら、それは日本人だ」の一言で語り尽くされています。1922 年講演のために日本に向かう船上でノーベル物理学賞受賞の報を聞いたアインシュタインは、滞在中、日本人の質朴さ、簡素さ、純粹さに感服し、後で広島、長崎への原爆投下の報を聞いて、「オーブエー(なんと痛ましい)」といったきり口をつぐんだと言います。

日本人の高貴さはどこから来るのでしょうか。お茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦先生が『国家の品格』の著書で述べられている、“日本の国柄”を支える精神性のことを言っているのだと思います。その精神性は武士道であり、武士道は「武士の行動規範」であります。ひとり武家社会にとどまらず、寺子屋教育を通じて、庶民の子弟、更には一般社会にも浸透し、読み、書き、そろばんと共に、日本人に浸透し、高い基礎的学力と共に、“日本の国柄”の礎をなしたのです。

“日本の国柄”は“情緒の心”と“形”であります。日本人の日常生活で大切にされてきている、“惻隱の情”、“卑怯を憎む心”の源泉であります。そこには論理では説明できない、問答無用の世界があり、これが家庭、学校における教育の基本をなすものなのです。損得勘定では物事を判断しない、西洋の金銭崇拜とはかけ離れた国柄が生まれたのです。

わが国において“日本の国柄”が醸成されていった、中世から 20 世紀に至る数世紀の間、**西洋で誕生した思想はダブル G、すなわち、GOD と GOLD を大切にす思想でした。**いち早く産業革命をなしとげた彼らが大切にしたのは論理、数理、合理性の世界でありました。

しかし、論理には出発点、仮定が必要であります。その出発点を決めるのは、他ならぬ情緒であります。洗練されたより高次の情緒によって出発点が与えられない限り、以後の論理の展開は誤った結果を生むこととなります。勿論、論理は重要です。その論理により、鍛錬された情緒が付加されなければならないというわけです。

わが国はこれまで「大化の改新」によって中国文化の日本化に成功し、「明治維新」によって、西洋文化の日本化にも成功いたしました。アメリカ生まれのロータリーにも、日本化の努力が行われたのです。ロータリー史上、シェルドンのモットーを受けて誕生したといわれる「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」(1915 年、サンフランシスコ大会)を下敷きにして、日本化が試みられたのが、大連ロータリークラブの古沢丈作氏(日清製油大連支店長)の「ロータリー宣言」(1928 年)であります。この「ロータリー宣言」を、1936 年神戸で開催された第 70 回地区大会で「ロータリーの綱領」の日本版として採用するよう提案が行われました。結果的には「ロータリー宣言」は「ロータリーの綱領」を補充するものとして採択された経緯があります。

しかし第 2 次世界大戦敗戦後、1991 年ソ連崩壊後は特に、グローバリゼーション、アメリカナイゼーションの名のもとに日本の国柄を犠牲にして西洋化したことで、今日の日本に、失われた 40 年をもちた結果になっております。戦後 70 年、西洋化、あるいは日米の調和の名のもとに出来上がったものは、浅薄な知的産物でしかありませんでした。

ロータリーが変質し始めた、2000 年からは、東洋、なかんずく我が国がリーダーシップを発揮すべき時代の到来と言われます。

“人類文化史が、20世紀の時期に刻印を押した、最も優れた職業人の倫理運動”ロータリーは、もともと東洋思想の属性であった、

と私には思えるのです。しかし、逆に、その対極にあるアメリカ、シカゴだったからこそ、世界はロータリーの誕生を求めたのかもしれませんが。

21世紀のロータリーが、職業奉仕を中心に踏まえた、人づくり組織として回帰し、隆々と栄えたあの20世紀初頭の、ロータリーを夢見るならば、日本のロータリアンの果たすべき役割は大きいと思います。その時のロータリーの哲学とはどんなものでしょうか。

21世紀の主演は、DNAと脳とコンピューターと言われます。この3つのキーワードを結ぶものは、情報であります。20世紀の科学はワトソン、クリックのDNAのらせん構造の発見(1953年発見、1962年ノーベル賞)を契機に、生命科学の時代と言われてきました。21世紀は心の時代と言われております。「DNAに魂が宿るか？」(F.クリック、1995年)と問いかけられております。DNAの二本の紐は、ハードでしかありません。心はそれが生み出すプラスの機能だと私は思います。

知性の指標として脳化指数(ハリー・ジェリソン、1973年)というのがあります。人類は他の生物に見られない高い脳化指数を持つといわれます。140億個にも上る大脳神経細胞が作り出す、途方もない数のニューロンが、DNAという物質レベルを超えたプラス、魂を作り出す、と私は思っているのです。何事によらず物質の量が、ある閾値を超えると、プラスが生まれます。

20世紀、既に私たち先進国の人間がこの豊かさを経験した今、生み出されるプラス、21世紀の哲学は、「足るを知る者は、貧しと言えども富めり」(老子)ということではないでしょうか。そして、このことの重要性を、日本が、世界が、認識した時に、ロータリーの明日も、世界の明日も見えてくるのではないのでしょうか。

21世紀のロータリーは、夢か、終焉か？

ロータリーが歩みを共にしてきた資本主義は、専門家の見るところ21世紀には終焉すると言われます。資本の自己増殖能力が失われたからであります。会員が減少するロータリーに終焉はないのでしょうか。数字のみを追いかけている間は、崩壊するのです。足るを知って、今の生き方を変えずして、今のようなロータリーに無関心な生き方を変えずして、夢を得る特効薬はないのです。

長時間の御清聴感謝申し上げます。このような機会を与えてくださって、久保泰造ガバナー補佐はじめ、西播第2グループの皆さんに厚くお礼申し上げます。

「補遺」 物心両面の豊かさを求める職業人の社交クラブ

～ 21世紀のロータリー～

私は、西播第2グループIMに於ける講演3日後、かねてより予定された手術のため、病床に伏すことになりました。幸いにして、主治医の神の手に救われて、一応の小康を得ることが出来たために、病床で2冊の本を読むことが出来ました。『量子力学で生命の謎を解く』(英国サリー大学のProf.カリーリ、Prof.マクファデン共著)『量子論から解き明かす「心の世界」と「あの世」』(岸部卓郎京大名誉教授著)であります。その教えるところが、21世紀のロータリーを考える上で、何らかの示唆を与えようとの思いで、ここに「補遺」として書き加えるものであります。

私がRID2680のガバナーを務めた、2011～12年度RI会長は、インド出身のカルヤン・バネルジー氏でした。彼は、サンディエゴの国際協議会において、半ば瞑想するかのように「深く自己を顧みれば、そこには自分の耳では聞こえないかすかな声があります。自分の目ではとらえられない、仄かな光があります。これらの声、光は自分の耳、目ではとらえられない、小さなものではあるけれど、心や魂を通して、初めてとらえられる、無限の力を持った、特別の力であり、人生の生き方をも変える大きな力があります。私達はそれをとらえて、抱きしめ、大切に世に広めましょう」と語られたのです。そこに見るものは、荘子の名言「見えない宇宙の姿を心で見、声なき宇宙の声を心で聞け」に通じるものであります。これは量子論的表現をすれば、見える世界(粒子としての量子)と見えざる世界(波動としての量子)の相補性ということが出来ます。

人間、宇宙を含めた、この世には「見える物質の世界のこの世」と「見えない心の世界のあの世」があります。「我思う、ゆえに我あり」で知られる、17世紀のフランスの哲学者、ルネ・デカルトの「物心二元論」は、その後の近代西洋科学の発展に決定的な方向付けを行いました。為に、西洋科学は「物質」の研究に終始し、「物質」を基盤に持たない、「心」は研究の対象外におかれてきたのです。然し本稿で述べた通り、20世紀に入って、DNAの二重らせん構造の発見を契機に、「命」や「心」をDNAという物質を基盤に説明しようとする時代が訪れています。しかしこれらはあくまで、物質を基盤に置く、マクロ的アプローチに過ぎません。

これまでのニュートン力学やアインシュタインの相対性理論のような、マクロの世界を対象とした古典的物理学に替わって、20世紀初頭から発展を続けている、量子力学は、古典的な物理学が通用しない、マクロ、ミクロの両方の世界を共に対象とした物理学として世の中に大変革をもたらそうとしています。いわば「物心一元論」的の科学であります。そして 10^{-15} メートルという、ミクロ的アプローチによって、「見える物質の世界、マクロの世界」においては、既に今日の情報社会(IT社会)の到来を可能にしました。人間の阿吽の呼吸までも読むロボットまでが登場しようとしているというのです。量子医学、生物学の分野においては、既に新しい知見が生まれております。

一方「見えない心の世界、ミクロの世界」においては、「心」までもが研究の俎上に上り始めています。

科学に物心二元論的の科学(古典的物理学)と一元論的の科学(量子力学)があるように、人類文明にも、物の豊かさを重視する、物質追求主義の西洋文明(物心二元論的文明)と、物の豊かさと、心の豊かさを共に重視する、精神文明を重視する東洋文明(物心一元論的文明)があります。

岸部氏は、これまでの人類文明の歴史を分析して「文明興亡の宇宙の法則」によって、西洋物質文明と東洋精神文明が、800年を周期に興亡を繰り返して来ていると考え、2000年以降は、西洋物質文明から東洋精神文明への文明交替による「心の文明ルネサンス」時代と位置付けられているのです。つまりは、1200年から2000年までのアングロサクソン文明から、2000年以降東洋、なかなずくわが国を中心とした精神文明が始まるというのです。

このことは、あたかも、本講演で述べたように、ロータリーがNPO法人としての物財による奉仕から、人づくりロータリーとして、精神性重視のロータリーへ回帰しようとしていることと符合するかのようには思えてくるのです。

ポール・ハリスは、かつて「ロータリーは宗教でも、宗教に変わる何ものでもなく、私たちが古くから大切にしてきた道徳を、日常の生活、なかなずく職業生活において実践しようとするものである」と語りました。ロータリーでいう道徳は「欲望の自己制御と他者への奉仕」であります。ロータリーは職業人として、利潤を追求するとともに、「足るを知るものは、貧しと雖も富めり」という、心の豊かさを求めているのです。

岸部氏は、人間の幸福度 = 物 / 心 = 所得 / 欲望と考え、「心」の時代、21世紀は、物の豊かさと、心の豊かさを共に大切にする時代であり、幸福を願うならば、老子の「足るを知りて、分に安んじる思想」(知足安分の思想)であり、禅でいう「吾唯足るを知る思想」(吾唯足知の思想)が大切であると結ばれております。この哲学こそは、ロータリーならずとも、物心両面の豊かさを願う人類の未来にとっては、永遠の哲学ではないでしょうか。

21世紀のロータリーは、一旦、歩みを共にしてきた資本主義と共に、終焉するかもしれません。そして物心両面の豊かさを願う職業人の社交クラブとして、回帰するのを待望するのみであります。もし世界のロータリアン全員がそれを心から待望するならば、願いは叶うのです。少しでも不協和音があるならば、それは実現しないのです。ミクロの世界からマクロの世界を洞察すれば、こんなことまで教えているように思えてくるのです。

(2017年5月12日、記)

後注:本稿は、西播第2グループIMでの講演をもとに、その後、若干の修正、追加を加えたものであります。また、本稿でいう国際ロータリーはRI、ロータリー財団はTRF、ロータリークラブはRCと略記し、単にロータリーと表記した時は、本来のRIのみならず、RC、さらにはロータリアンまでを包含します。文脈でご判断下さい。また、ロータリーの会員とは、厳密にはRCですが、ここでは、多くの場合ロータリアンを意味しております。

ロータリーとは何だろう

RI 第 2680 地区パストガバナー	久野 薫
RI 第 2680 地区パストガバナー	中村 尚義
西播第二グループガバナー補佐	久保 泰造
龍野ロータリークラブ	官野 英彦

(久保)

それでは只今より質疑に移ります。この質疑は、お二人のパストガバナーに「ロータリーとは何だろう」というテーマでお尋ねするというコーナーです。

(官野)

時間の関係で手短になることをご了承頂きたいと思います。先ほどはロータリーの原点から現在の危機に至るまで、どのような理由でどのように変質してきたのかをお話下さいました。中には大変耳の痛いご指摘もございました。それでは今日のお話の中から何点か断片的にはなるかと思いますが、お聞きしてゆきたいと思います。その前に会場の皆様が現在のロータリーをどう思われているか、是非知っておく必要があるのではないかと考えておまして、この場で会場の皆様に「生まれかわっても、ロータリーにもう一度入られますか？」と問いかけてみたいのです。よろしゅうございますか。それでは会場の皆様にお尋ねします。生まれ変わっても、もう一度ロータリーに入るといってお考えの方は恐れ入りますが、挙手を願います。ありがとうございました。今ここに 100 人くらいの方がいらっしゃると思いますが、半分以上の方がお手をお上げ下さったかと思えます。本当はここでこの結果に対してのご感想をお伺いしたいのですが、時間の関係で割愛させて頂きます。もう一つ、久野パストガバナーに伺っておきたいことがございます。ガバナーをお努めであった 2012 年 3 月の地区大会で、例会の形骸化について触れておられます。このことについてもう少し詳しく、具体的にお話頂けますでしょうか。

(久野)

先ほど「生まれ変わっても、もう一度ロータリーに入られますか？」という司会の官野さんの質問に半数以上の方が「入る」とお答えになり、また半数近い方が否定的であったという結果に興味を持ちました。何故なら、近年のクラブの会員構成は 70% 以上の方が 1990 年以降の入会という事実と関連しているように思えるからです。そのような方にとっては、現状のロータリーがロータリーであり、どこが変わったの？どこがおかしいの？と思われるのではないのでしょうか。

例会の形骸化についてのお尋ねに関しては、私の意見はこういうことです。先ほどスライドでお示し致しましたけれども、ロータリーには「組織理念、目的、目標」があります。それを学ぶ場所が例会のはずです。ロータリーの組織理念「奉仕の理念」を達成するための 3 つの「制度の中核」は「限定会員制度、例会出席の重視、情報の交換」であります。それにも拘わらず限定会員制度の崩壊、例会卓話軽視、出席軽視の現状です。

情報交換として、クラブで会員自身がお話をされることがだんだん減ってきているのではないのでしょうか。お話をされるのは、多くは外人部隊です。呼んできてお話を聞く、時には音楽家を呼んできて演奏してもらい、すなわちお楽しみ会になってしまっています。それが悪いと言っているわけではなく、情

報交換の機能が衰えてきていることを憂えているのです。仲間である会員の皆さんがどのような考えを持っておられるのかを知ることは、互いの勉強になるはずなのに、それが希薄になってしまっています。形式だけは昔から美しいまでに素晴らしいのですが中身が伴わなくなってきました。また日本の例会は、金太郎飴と揶揄されるほど、画一的で、クラブの独自性に欠けています。例会が終わって感想を聞いてみると、いい話が聞けて良かったと言われる頻度は必ずしも高くはありません。わざわざ貴重な時間を割いて例会に出て来て、何か得るものが無ければ、メリットがないのです。このことを私は例会の形骸化と言っているのです。

先ほど中村パストガバナーが「物々交換」「分業」「徳の形成」の話をされましたが、RIの現状は、そのための例会はもう要らない、それよりも奉仕活動で汗をかきなさいとなってきているのではないのでしょうか。外国の例会では、奉仕哲学の話なんかはお呼びではないようですが。

(官野)

ありがとうございました。次の質問ですが、ご講演で頂いた久野パストガバナーのお話で、「足るを知る、欲望を抑えて他人に尽くす」といったお話がございました。この思想がロータリーの思想を引っ張ってゆき、新たな職業奉仕の哲学を構築してゆく鍵になると思いました。そして久野パストガバナーは「ロータリーに対する無関心の態度を改めよ」ということでした。それが「原点への回帰」への道だと思うのですが、原点への回帰はあくまでもクラブが主体ではないかと思っております。ロータリーの皆様は高い潜在的能力を持っておられると思います。しかし、それを引き出して一つの方向にまとめて動かすということは、とても大変であると思います。クラブが原点への回帰の道を成し遂げるのは容易ではないと感じておりますが、これは思い過しなのか、それとも心配はいらないのでしょうか。

(久野)

他者を思いやり、他者に尽くすという「奉仕の理念」は自分が「足るを知る」ということから生まれてくると思っているのです。また、官野さんが仰るように、クラブには高い潜在能力をお持ちの方が少なくないのですが、惜しむらくはその能力をクラブが十分に引き出せていないように思います。そのような方にリーダーシップを発揮してもらおうべきポジションが、必ずしも与えられていないように思います。適材適所の人事構成が出来ているか疑問です。言葉は悪いのですが、クラブがロータリーを趣味にしている人に引きずられていませんか。ニッパチの原理ではありませんが、会員の多くはロータリーに無関心ではありませんか。その意識を変えることから始めなければなりません。そうでなければ、クラブ主体で原点への回帰を成し遂げるというのは大変難しい仕事だと思えます。

啓発という言葉がありますね。啓発と言うのは「憤せずんば啓せず、排せずんば発せず」つまり、あと一歩まで判ろうと努力した者でなければ教え導かない、判っているがうまく言葉で表せない人でなければ助けの言葉を発しない」という孔子の言葉ですよね。学ぶ意思、意欲が大切です。今日お集まりの西播第二グループの皆さんがそのような方々でしたからお話が出来たのだと思えます。

クラブや地区でバズセッション形式でグループ討議を行うことがありますね。日頃ロータリーのことを考えていない人が集まっても建設的意見の交換は期待できません。自分の考えを持った方々が集まって初めて実りのあるバズセッションが出来るのだと思えます。そうでなければ私には時間の無駄のように思えて、バズセッションはやめて欲しいとさえ思っています。私は殆ど諦めの境地です。

(官野)

リーダーに諦めていると言われると、質問しにくいのですが、容易ではないということになれば地区の

出番と思うのですが、地区はどのような形で関与できますでしょうか。

(中村)

「ロータリーとは何だろう？」と訊ねられたら、「それはひとつの思想・奉仕理念のことだ」と答えるでしょう。そして、「クラブは？」と聞かれたら、「ロータリーを体得し実践するところだ」とお答えするでしょう。ロータリーには「異質の等質論」という言葉があります。異質というのは職業や性など多様性のことであり、等質とは考えるレベルがほぼ一定ということです。この場合の議論はスパイラル的に良くなるという論理です。ところが異質の異質では、その議論は噛み合わず喧嘩になってしまいます。クラブ(例会の意味ではない)に議論の場がなければ入会した会員は遊ぶことしか覚えません。大学生に、勉強のために仕送りしたのに、全て遊びに使われてしまうといったことと同じで、今のクラブの傾向はこのようなことではないでしょうか。但し、議論の前提条件は会員の思考レベルの等質性です。

クラブ(或いは会員)の質を上げようと思うなら、ガバナー補佐が本来の役割を果たすことも一つの方法だと思います。本来の役割とは地区のリーダーの一員としてガバナーを補佐することです。IM も立派な仕事ですが、本来の仕事ではありません。クラブの中をよく見て良いところ悪いところをガバナーに伝え、クラブのランクアップを図ることです。私ごとですが、次年度地区研修リーダーとして申し上げますと、次年度開催される各セミナーでは、ロータリーの基本理念を共に学び、1年間積み上げていく。そして1年後に各セミナーに参加して良かったと思われるようにしていきたいと思っています。クラブとRIを結ぶ役割としてまだ諦めていません。

(官野)

いずれにしても会員自信の強い意思や覚悟ということになるのでしょうか。

日本のロータリーはあくまでも職業奉仕こそが第一義として今後も継続していくものと思います。ところが、RIは人道的な奉仕活動に目的を切り変えてしまっています。乖離は縮まらないと思いますが、歪だ不幸な関係が続くことになります。私たちはRIとどう向き合えばよろしいのでしょうか。

(久野)

「職業奉仕がロータリーの根幹である」/「人道的奉仕がロータリーの根幹である」が21世紀ロータリーのビジョンとして問われております。これは別の機会でお話したいと思います。

地区がどんな形でクラブをお手伝いできるかのご質問ですが、先ほど申し上げたとおり最初にRIに興味を持ってもらいたいのです。RI、地区、クラブは悩ましい三角関係にあります。一番辛い立場にあるのは地区だと思いますね。ガバナーはRIの末端に位置する役員として、RIはクラブの事をガバナーに丸投げしている形です。ガバナー補佐は文字通り、ガバナーを補佐するための公的役職で、RIサイドの役職です。地区委員はクラブの会員の中からガバナーによって選ばれます。決してクラブの会員自らの意思で出向しているわけではありません。

ところがガバナーやガバナー補佐がクラブのお手伝いをしようとしても、クラブは歓迎されるでしょうか。クラブに自治権があるので余計なことはいわないで欲しいとなりかねないのです。ガバナーとガバナー補佐は地区とクラブの板挟みになってしまうのです。こうなってくるとクラブは自分たちで自らの進む道を模索することになります。

この地区でも2013~14年度以降RIを脱会したクラブが3クラブありますが、ガバナーや地区はどの程度関与できたでしょうか。また地区によって脱会したクラブの方々の追跡調査がなされたでしょうか。クラブの人がRIや地区に何かを期待しておられるのか図りかねているのです。「特別月間」に出張卓

話を期待されるばかりでしょうか。受け身の姿勢は改められなければいけないと考えるのですが。

(中村)

地区には多くのクラブ会員が出向いていますが、その効果がクラブになかなか反映されません。なかには、地区に出ると嫌われ者になったりします。クラブと地区の乖離です。RI(地区)では当然の話でもクラブでは理解出来ていないこともしばしばあります。久野さんと違う見方をすれば、RI はやる気のないクラブに対して宿題を与えるしかないと思っているのではないか。日本人の8割はそれに従うので、どんどん宿題がくる。そして取ってつけたような、血の通わない補助金プロジェクトが数多く実施される。それを地区が無条件で了承している状況ですが、これでは質の向上は図れません。ただクラブの誰かが馬鹿になって、ロータリー理念に基づく行動を起こせば、活性化が可能となるでしょう。

(久保)

会員増強はどこクラブでも喫緊の課題ですが、会員増強でどこを切り口にすればと考えた場合、質の議論をどうするかという問題があります。深川パストガバナーが会員の質が大変落ちたと言及されていました。質を追求するとロータリーに入る人が誰もいなくなるという意見が蔓延しています。質と量の問題は表裏一体になっていると思いますが、お二人のパストガバナーにこのことについてご意見をお伺いしたいと思います。

(久野)

会員増強に妙手はないようです。RI の考えているのは、女性会員、若い会員の増強にあります。そのための規制緩和です。やがては、「クラブ会員の権利と負担の平等原則」は無くなるでしょう。質か量かの問題ですが、質も量も大事です。質の高い人ばかりを選ぶとなると誰も入って来られません。70点でいいのではないのでしょうか。「協調性」を持つ人が大切です。70点を100点にするのはクラブの力です。確かに会員数が少ないとクラブに活気が出ません、活動もできません。しかし質も必要です。そのためにはクラブの中で研修し質を高めていく必要があります。会員の質を高め、磨き上げることができないクラブは情けないとしか言いようがありません。それよりも、そもそもなぜ会員増強は必要なのかという根本問題です。先ほど申し上げた通りクラブに活気が出ないというだけでしょうか。「奉仕の理念」を身に着けた人を世の中に増やして、社会貢献する為でしょうか。財団を経済的に支援するためでしょうか。もう一度考える必要があります。

(中村)

ロータリーでいう「良質な人」という基準はご存じでしょうか。シェルドンの表現を借りれば「連帯意識」のある人が良質で「自己中心的」な人が悪質ということになります。彼が1921年にスコットランドのエジンバラで開催された国際大会のスピーカーとして行った有名な講演の中で「他者に対する奉仕の心こそ、次元の高い立場からすれば、社会的自我なのである。」(Service to others is the enlightened self-interest)と述べ、かつ「自己中心的立場こそ、思慮なき自己破滅の心」(Selfishness is the unenlightened self-destruction)と述べています。つまり、現在どのように自由競争が厳しくても、自分を絶えず他者との相関関係において捉え、自己の幸せと他者への影響とを勘案して物事を判断しようとする職業人が、必ず、少数ながらいる。この立場は、最初は周囲の認識が得られなくとも、永い間には社会的評価を得ることができ、周囲の者たちの信頼と尊敬の念を呼び起こす。商人間にあっては、これを「信用」と呼んでいる。単なる職業人の孤独感を癒やす親睦団体から、職業の遂行と社会改良と

を同時に実現しようとする親睦 + 奉仕団体となっていくわけでレベルの高さを感じます。

2016年のクラブ定款によると、第10条・会員身分(Membership)では、善良さ、高潔さ、リーダーシップを取ることができ、市民社会で良い世評を得ており、奉仕する意欲のある成人によって構成される、とあります。かなりハードルは高いですね。この会場に、これに該当する人はどの位いらっしゃるでしょうか。

また、クラブに新しい人が入会しなくなった理由はクラブにも責任があると思います。その理由は古いクラブにある制度疲労です。家の建て替えではなく、壊す時期に来ている様な状態です。この西播第2グループには感じられませんが、私が所属する淡路島ではクラブに入会し、ただ同好会だけが楽しく、入会して良かったと言う会員がいます。クラブに教育力が無いから、ロータリーの素晴らしさに気がつかない。立派な理念があるにも関わらず残念に思います。こんな現状ですから20人集めて新クラブを作ろうかなと思っているくらいです。そうすれば古いクラブも新しい風を感じ少しは活性化していくのではないのでしょうか。

(久保)

有難うございました。まだまだお聞きしたいことが沢山ございますが、予定の時間が来てしまいました。最後のお尋ねです。お二人はガバナーとして、またガバナーご退任後も地区のリーダーとしてロータリー活動にご尽力くださっております。このような私たちが敬愛するお二人のロータリアンが「ロータリーで一番好きな言葉」をお聞かせ下さい。

(中村)

「禍福は糾える縄のごとし」という言葉が好きです。禍も福も同じだ、幸せの次に不幸が来るのではなくて、不幸だと思っている事が実は幸せだったりするということです。クラブに置き換えれば、会員減少や財政基盤の悪化は禍に見えるが、実は福なのだ。現象的には禍かもしれませんが、クラブやロータリーの本質をじっくり考える好機なのかもしれません。

(久野)

ロータリーで一番好きな言葉と言われましたが、ロータリーといえども所詮人間の集まりです。ロータリーで大切にしている言葉と、人生で大切にしている言葉には大きな違いはありません。その意味で私は「直向き」とお答えしたいと思います。学生時代は好きな言葉を「努力」と言ってきました。大人になってからは努力では子供ばいと思い、「直向き」と答えるようになりました。よく考えてみるとロータリーの中核的価値観である高潔性に通じていると私は思っているのです。直向きに生きることが高潔性にあります。ところが最近日本人に直向きさが少なくなったように感じています。ロータリアンにも直向きさが無くなってしまいました。限られた命ですから漫然とロータリーライフを送るのはもったいないと思います。私は70歳を過ぎてから次から次へと病気に患わされてきました。こうなると、「平穩無事」であることこそ最大の幸せと思えるようになりました。一言で言うと「静謐」です。今はそのような心境です。

(久保)

ありがとうございました。これでこのコーナーを終了させていただきます。お二人のバーストガバナーにお礼申し上げます。会場の皆様ご静聴ありがとうございました。

人類の繁栄とロータリー運動

国際ロータリー第 2680 地区パストガバナー 中村 尚義(洲本)

「成功を手に出れない人たちは 自分の欲望をまったく犠牲にしていない人たちです。もし成功を願うならば、それ相当の自己犠牲を払わなくてはなりません。大きな成功を願うならば、この上なく大きな犠牲を払わなければいけないのです」

これはイギリスの格言ですが、ジェームス・アレン(1864.11.28～1912 年イギリスの作家・哲学者。自己啓発書と詩。『原因と結果』)の現代に残る名言です。アレンはロータリーの創始者・ポール・ハリスより少し前に生まれていますがほぼ同世代と言えるでしょうか。この成功を Profit(利益)に、犠牲を Service(奉仕)に置き換えたら、ロータリーの第 2 モットー「He (One) Profits Most Who Serves Best 最もよく奉仕するもの最も多く報いられる」と意味していることは同じ言葉で同義語と言えるでしょう。日本の古典には「積善の家に余慶あり、積不善の家に余殃あり」があります。

“Service above Self”は更に 1 番目の標語として現在のロータリー活動の中核となっていますが、これには、イギリスの伝統文化が滲んでいます。武士道の精神の反映される言葉で、I Serveに通じます。日本では、石門心学の「先義後利」また、天台宗・書写山の大樹住職は「忘己利他；己を忘れ、他者を利するは慈悲の極みなり」と言い表しています。アメリカ生まれのロータリーの精神(理念)が必ずしも特別なものではないことが分かります。洋の東西を問わず、時代を超えての「人間の心理」だと云えます。自分の欲望を抑えること、即ち自分の利益を少し後に考え他者の利益との調和を図る、そうすることによって、幸せな社会生活を全うできると云っているのだと思います。

ロータリーはいろいろなカテゴリー(範疇)のなかでこれらを考え、日常の生活に適用する、極めて誠実な実践的な哲学といえます。

人類の歴史は、霊長類時代はとも角、今の人類(新人類)は 20 万年前、少なくとも 10 万年前には物と物の交換が始まっていたといわれています。物々交換がはじまり、世の中は大きく変化・進化していきます。また、1 万年前には 1000 万人未満だった人類の人口は、今世紀の半ばには 100 億人近くまで増えていることであろう、といわれています。そういう背景で、今日の話のタイトルを「人類の繁栄とロータリー運動」としました。人類の繁栄とは大きく出ましたが意味はご理解頂けると幸いです。

ロータリーの目的(綱領)の主文；ロータリーの目的は、意義有る事業の基礎として奉仕の理念(Ideal of Service)を奨励し・・・とあります。他人のために何かをすること、他人のニーズを充たすことを自己の責務として行なうことです。事業の成功を願う(結果)なら、自分のことを後にすること(原因)がなければならない。これをやったらなんぼ儲かるなんて、浅ましい考えで仕事をするな、ということです。言葉では理解できますが、いざとなるとかなり大変なことです。

宇宙工学の大家、糸川英夫博士が「どういうとき、一番幸せを感じますか？」という質問に、「自分のためにやった事が人のためになり、人のためにやった事が自分のためになる。こういうときに一番幸せを感じますね」ということでした。さすがそこには、仕事に対する積極的な取り組み方を感じることができます。これも、ロータリー運動の一節ではないでしょうか。

職業奉仕は別の表現を借りれば、ちょっと難しくなりますが、「職業を通して社会のニーズをほぼ完全な形で満たせるよう努力を重ねる。それによって、自己の職業の品位と道德水準を高め、社会から尊重される存在にすることが出来るのです。同業者にも同じ事を勧めます。私たちが真のロータリアンであるか否かは、私たち自身とその職場が社会の模範となるように努力することを、自己の責務と考えているか否かにかかっているのです。(ロータリー辞典より)」となります。

「人は受け取ることよりも、与えることからのほうが、はるかに大きな喜びを手にすることが出来る」これも、先ほどのアレンの名言ですが、奉仕の理想の一面を述べた言葉と言えます。こういったことを例会などあらゆる機会に学ぶところにロータリー運動の意義があります。私も色々な団体に所属していますが、ここまでやってくれる団体はありません。ロータリーは本当に良いところだと思います。自分を啓発させてくれます。ロータリー理論・Service の概念を追求するには、職業奉仕論が一番適しているのではないかと思います。

さて、このロータリー運動(職業奉仕)と人類の繁栄の関係はどこにあるのか。ロータリー運動(職業奉仕)の根っこは「徳の形成」あるいは「徳の支配」という言葉で表現されることが多いようですが、「徳の形成」が窺えるのは 5 万年も前からだそうです。ロータリーの根幹をなす(職業奉仕的)考え方や行動は(当時の物々交換を商売・職業と考えていたかどうかは別として)その物々交換と信頼の規則において「徳の形成」が 5 万年も前からあったとは驚くばかりです。どういうことでしょうか。交換には物と物の交換だけではなくアイデアの交換があります。この交換は、権力や腕力による場合もあったが、それより「調和」のとれた交換の方が長続きすることが分かった。双方の良好な関係は良質な物を創り出し、交換は分業を生み、交易を生んだ。交換は支配と進化し分業は更に専門化していきます。

丘や山で捕れた獣の肉や野菜は海の幸・魚介と交換された。より鋭い鋸(もり)も獣の骨で作られ、より収穫量も増えた。やがては鐵を使う。山での獲物と海での収穫物は交換されそれぞれが分業することで量と質が向上していく。一方、女は恒常的に獲得できる農作物(デンプン質)の栽培を仕事とし、男は獲物を追う(タンパク質)。毎日の狩りで獲物が無くとも、食料にはこと欠かなくなった。そのように男と女の分業することにより生活の安定を図っていったのです。

このような技術革新あるいは社会において加速度的にイノベーションを起こしているのは、活発化するアイデアの交換です。ロータリーの例会も、もともとアイデアの交換の場です。アイデアを与える側にも、アイデアを受ける側も徳の形成がなされなければならない。今日で云うロータリー理論そのものです。ロータリーは互惠主義からアイデアの交換に発展していきますが、この思想の基本にあるのが“Service above Self”徳の形成を例会の中で養っていきます。例会出席の重要性はここにあり。単に、連絡機能で終わってはなりません。そういうクラブに発展させた初期ロータリアンは大したもの。ここがロータリーのひと味違うところでしょうか。他の奉仕団体ではまねが出来ないところでしょう。でも残念ながら、これらを十分に理解し、仕事に適用している会員がどの程度あるだろうか。しかも、職業奉仕も言葉だけで、「ロータリーは職業奉仕さえしていればそれで良いのだ」となると、なおさらたちが悪い。

話は戻りますが、ロータリーの例会はアイデアの交換の場であった。人類史上、当然(当たり前)のことだと思います。相互扶助のみのロータリーだったらとっくにその役割は終わっていたでしょう。

ところが、最近、アイデアの交換がなされているのは職業上の事よりもむしろ、地域社会や国際社会への取り組みに対する奉仕のリソースとして行われている場合が多いように思われます。例会等でのアイデアの交換は自らの職業を未来永劫、繁栄させるために重要な意味があるのですが、ひょっとしたら、日本のロータリアンの減少はここに起因しているかもしれない。これで良いのかどうかは議論を俟つところですね。

米国第 3 代大統領・トーマス・ジェファーソンは、「私のアイデアに共鳴して受け入れる者があっても、私のアイデアは減るわけではない。それは私のローソクから火を貰う者があっても、私のローソクが減らないのと同じだ」と言っています。イノベーターの仕事とは「共有」することなのだ。例えば、自転車を誰かに与えたら、自分には残っていない。けれども自転車のアイデアを誰かに与えても、それは自分に残る。自転車は多くの部品の組み合わせで作られる。その各部品は分業によりより優れたもの

に変わっていきます。自転車も発明されたときより今の方がはるかに快適で丈夫であるに違いない。アイデアの交換と分業は今日の繁栄をもたらしました。蛇足ですが、繁栄を謳歌した1950年代より暮らし向きが悪化した地域を見つけるのは難しい、といわれています。この半世紀の間に、1人当たりの実質所得がわずかでも減った国は6つ(アフガニスタン、ハイチ、コンゴ、リベリア、シェラニオネ、ソマリア)、平均寿命が縮んだ国は3つ(ロシア、スワジランド、ジンバブエ)しかなく、乳児生存率が下がった国は1つもない。

ロータリーの職業奉仕論の中に「アイデアの共有」という言葉が出てくるが、これは繁栄の理にかなっている。18世紀のイギリスの産業革命は目覚ましいものがありました。イギリスは自国の繁栄のために、1774年、機械輸出禁止令を出しました。ところが、1843年には廃止しています。それからの近隣諸国の繁栄は2005年の調査では、発明から最初の模倣製品が現れるまでの時間は、1895年の33年から1975年の3年にまで着実に減少している。最近ではもっと短縮しているでしょう。

ロータリー奉仕論の核をなす「利己と利他の調和」は交換や分業の原則からすれば、ロータリーの専売特許でないことが分かる(5万年も前からあったのだから)。ところがこれをロータリーの中に持ち込んだ事はロータリーの繁栄に繋がっていったと推測しても過言ではない。毎週一回の例会を人生の道場と位置付け、大企業の社長も小さな商店主もお互いの職業を認め合いアイデアの交換やそれによる人格の形成に努めた。

ところが、最近ではロータリーの本質的なことがクラブで語られなくなった。実に寂しいものです。そういうロータリーを面白くないと思っている人も大勢いる。地区はどのような活動をしていったら良いのかアイデアを下さい。

Exchange of Idea(アイデアの交換あるいは交配)の基本は愛です。ロータリー活動の基本も「愛」です。創始者・ポール・ハリスは会員の資格として、「誰であれ人を愛する人は、ロータリアンになるポテンシャル、可能性がある」と云い、パウロはコリント前書のなかに、「山を動かすような信仰があっても、身体を信仰の為に投げ出しても、もし愛がなければ無に等しい」と記述しています。そして孔子は、「人にして仁ならずんば、礼をいかにせん。人にして仁ならずんば、楽をいかにせん」と。東洋も西洋も「愛」を基本においていることが分かります。

ギリシャ語には、英語にもない微妙な愛の四つの形態を表す言葉があるといえます。第一:ストルゲー(家族の愛)。第二:エロース(男女の性愛・お返しを期待する愛)。第三:フィリア(友情などに見出されるような最も真実で自然な優しい愛情)。第四の愛:アガペー(くじくことのできない慈悲、打ち破ることのできない善意、を意味する)。第三までの愛は、いわば感情の移入が簡単に行われ得るもので、子供はかわいいし恋人は好きでたまらない。親しい友人に親愛感を持つのも、水が低きにつくように自然であります。ところが、「汝の敵を愛せ」という部分の愛は、敵を好きになって愛せよと言ったのではない。意志をもって自然の情に反して「理性の愛」を持ってと言ったのです。このアガペーの愛に限り、相手から感謝されることを期待できません。相手に対して憎しみを持つことなく、「くじかれることのない慈悲と善意」をもって、相手のために一番いいことをしようとする。ロータリーにおける真の意味の愛は、このアガペーの愛において他にない。私たち日本人には比較的苦手な愛ですが、ロータリーから学ぶこの愛、心に留めておきたいものです。

最後になりました。考える者、行動しなければならぬ。職業奉仕は2つの面で捉えることができます。一つは今まで述べた、企業、経営者そして従業者が持つ職業倫理からみた経営としての見方。もう一つは、職業を持たない人あるいは持てない人のための奉仕活動です。仕事を通じて人類は尊厳

のある暮らしを立てることが出来ます。また、社会を構成する人々が、各自の才能と意欲を最大限に発揮すれば、社会は大きく成長します。

ロータリーの職業奉仕は、1つはロータリーの中だけではなく、他の職業人とのネットワークを広げアイデアを交配することが出来ます。2つは求職者に対してキャリア相談も出来ます。3つは若者達への進路指導も出来ます。これらはみな、国際ロータリー(RI)が提唱している項目です。その高度なプログラムの1つはVTT(職業研修チーム)です。これも、RIの新しい取り組みです。従来のGSE(グループスタディ交換)より進化しています。

人は後世に何を遺して逝けるのか。清き金かそれとも事業か、本を書き(著述をし)思想を残すことか。それとも教育者となって学問を伝えることか。しかし何人にも遺すことができる最大の遺物がある。それはその人らしい生涯を送ることである、と明治の思想家・宗教家である内村鑑三は説く。

私たちが職業人として成功するために、そしてロータリー活動をより良い方向に導くためには愛と明晰さと勇気が必要です。ロータリーの活動は主体性を持たなければ何も見えてきません。これから先も人類はどんどん繁栄していきます。良い形でその繁栄を導くためにはロータリアンの叡智とエネルギーを必要としています。

- 赤穂ロータリークラブ -

久野パストガバナーの講演内容は、今日のロータリークラブの現状ではかなり辛口のお話でありました。しかしお話を聞き、私入会后 36 年目を振り返ってみて当時を思い出しました。

私が入会した当時は、久野パストガバナーのお話内容の通り、ロータリークラブの規定は今とは大きく違い厳しいものでありました。以前はロータリークラブに入会希望者もありました。入会には選考委員会、職業分類、理事会の承認を経由するうちに、入会予定者の名前がいつの間にか消えてしまうこともありました。

久野パストガバナーのお話の中では、入会者は誰でもよいのだというものではない、入会してからロータリーを学んでいただければよいという考えもありますが、量だけを増やすものではない、ロータリアンになれる質、人格、世間の評判も必要であると指摘された通りであると思います。

古いロータリークラブ時代の背景を強調してお話をしておりましたが、時代は変化していくもので、何時までも旧態依然の内容を強調していれば衰退していくことも考えなければならないと思います。

久野パストガバナーは体調のお悪い中にも拘らず出席を承諾されたということは、久保ガバナー補佐の強い思いが久野パストガバナーの心に通じたという事だと思いますが、久野パストガバナーもどうしても現ロータリアンにこれだけは言っておきたいという正に我々に対する遺言のつもりだったのではないのでしょうか。その様に心から感じます。

では本題に入りますが、最近のRIは規定審議会ですごいロータリーの核心の部分が緩められていて、一体ロータリーは何処へ行こうとしているの？とやや心配な部分が出てきている様に私も思います。とにかく規定審議会が開かれる度に、一業種一人のかつての原則、週一回の例会の原則等がくずされ、そして財団と言えば「金」「金」で金集めに躍起になっています。そして金を集めるには会員を増やした方がよいので、その為に「増強」「増強」と言っている様に思います。しかし今のやり方で会員が増えるでしょうか。もし増えたとしても真のロータリアンが増えるでしょうか。

私はかつて或る尊敬する先輩ロータリアンから『ロータリーは親睦と奉仕の中で「自分を磨いて行く」ものだ。「自己練磨」こそがロータリーの本尊だ』と教わりました。米山梅吉先生も「ロータリーは人生の道場だ」とおっしゃられました。そういうロータリーに今なっているのでしょうか。又今後なっていくのでしょうか。少し不安に思っています。

ただ久野パストガバナーは少し複雑な胸の内を明かしておられました。会員増強は増やせば良いというものでは無いが、現状を放置しておくこと減少は避けられない。だから 100 点満点で無くても良い。60 点位の人であれば入会していただいて、それをみんなで育てて行けば良いとおっしゃられました。(昔からよく言われる会員増強炭火論です。) そうすると今度は現会員の力量が問われてきます。現会員一人一人が新入会員を立派なロータリアンに育てられるその力量を備えているか、それが問われてきます。増強は正に現会員の我々の問題となって返ってくるわけです。ここが一つの論点になってくると思います。

ここで僭越ながら、私の思いを述べさせていただくと、我々は会員を増やせば増やす程ロータリーは良くなるという幻想というか、錯覚を起こさないだろうか。確かに会員が多い程、お金は沢山集まり大きな事は出来るが、真に意味のある事が出来るのか。又それが恒久性を保ち得るのか、やや疑問を感じます。

久野パストガバナーの講演で、RIがロータリーの入会条件、例会の回数等を緩和しているお話、現ロータリアンは賛成する人は少ないと思う。元に戻しロータリーのイメージを上げて欲しい。

中村パストガバナーのお話で、

成功を得るものは、犠牲を得なくてはいけない。

他人の為にする事、自分の事は後にする。

人の為にした事が、自分の為になっている。

ロータリーに向き合って考えなければ、バスセッションで話をしても答えが出ませんよ。

人間の集まりで大切な言葉は、ひたむきに生きる事が高潔性に繋がります。

と言われていました事が印象に残っています。

まず自分が出来る事をやっていく事が大事です。

「和して同ぜず」これも大事です。という事を学びました。

ロータリーの哲学である「超我の奉仕」を尊重し、実践してゆくこと、そして職業奉仕が基本であることを充分心得て行動することが、ロータリアンとして最重要であることを再認識した。

国際ロータリーは時代のすう勢に流される傾向にあり、確固たる精神的基盤に基づく日本のロータリアンこそ、今後中核的な存在として活躍してゆくことが望ましいと感じた。

会員の勧誘に当たっては、親睦、奉仕、高潔性、多様性を考慮し、共に学ぶ努力をしようとする人物を選ぶことが重要であると思う。

久野パストガバナーの何時もながらの精緻な数字をベースにしたロータリーの変化について、納得いく話を承ることが出来ました。

ロータリー創立の理念から、時代の変化、巨大化による問題が発生していることはうなずけられるものの、それに反する意見として理解出来る所が多いのですが…。RIの役員として三木パストガバナー、滝澤パストガバナーらに改革のリーダーたれと言われたこと、もっともとは思うものの、ご二人の肩にずしりと来るものがあると思いました。

ロータリーのモットーとする超我の思想は、天台宗の開祖伝教大師が「忘己利他」と説かれたことを、兵庫県太子町出身の山田恵諦天台座主(昭和46～平成6年、253代)が改めて引用し、世界宗教サミットで発言したのを現在の天台宗のモットーにしているもので、人類の根本原則を述べた言葉としてロータリーの精神に相通ずるものであると考えます。

昔の聖人、君子の言葉は何れも共通して大切で人生の教訓となるべきものですが、なかなか実行が難しい。難しいからこそ意味があるのでしょうか。

ロータリーのあり方について、何れにしても一石を投ずるお話を改めて聞くことにより、ロータリーのメンバーとして心にとめることでIMに出席の意義があったと思っています。

私はロータリー歴18年目となりました。自分だけでは無いと思いますが、入会当初はロータリーに関しては右も左も横文字用語など、全く分からない状態でありました。

年を経るごとに毎年いろいろな役職を頂き、その立場立場の経験をしていくことで、自分なりにロータリーを徐々に理解出来ていった。

経験を重ねていくうち、ロータリーとは「奉仕が出来る心を持てる人づくりの場」ではないかと考えるようになり、ロータリーライフが自分の生活の一部となった。

しかし、そう言いながらも、ある程度慣れてくると少しずつつまなり化の傾向になっていたのも否めない事実です。

この度のIMで久野パストガバナーの講演にて、ロータリアンの行動規範・ロータリーの夢と哲学～21

世紀のロータリー～を拝聴し、ロータリーの理想であろうお考えを聴かせて頂きました。もちろん完璧な実行は私には出来かねますが、自分なりの日常生活行動に活かしていくとともに、そういうロータリー活動をしていきたい。

「ロータリーの夢と哲学」を職業奉仕を中心に語られ、日本のロータリーに対する認識「成熟した職業人による職業を通じて地域社会に貢献する組織」こそロータリーの目的である。

超我の奉仕とは簡単にいえば、人が望むことをすれば良いと私たちに示されたこと。常日頃からこのような意識をもって生活を送りたいものです。

IMでは大変有意義な、かつ深遠なご講演をいただきました。心より厚く御礼申し上げます。特に久野パストガバナーにおかれましては、手術前の大事な時期に、心身のお疲れは、きっとおありだろうに、ご講演を賜り、胸が熱くなりました。

無礼を承知で述べさせていただきます。講演をお聞きする前と、その後で変わったことは、今何が問題なのかがより明確に理解できたことです。

ロータリークラブはこのままではだめだといわれましても、具体的に何がだめなのかわかりませんでした。今でも何がだめなのか、はっきりとはわかりませんが。

ロータリーのルールが甘くなっているのがいけないのでしょうか。例えば入会時の要件、入会金の必要性の有無、毎週例会をするのか等々です。赤穂ロータリークラブでは、個人的な意見ではありますが、入会、例会の規定は一切緩めないようにしたいと思います。

女性会員の入会に関しては、昨年アンケート調査を行いました。未だ機熟さずといったところです。

もう1点感じましたことは、パストガバナーのご講演があまりに素晴らしく、鬼気迫るものがありました。それ故に、自分のような浅学菲才の者が、ロータリーの変革ができるだろうか、と自信喪失に陥っています。シカゴ暗黒時代に、FBIのエリオットネスが、ギャングのアルカボネに挑戦状を叩きつけるとき、具体的には、樽に入った密造酒を斧で割るとき、これでやるか、やられるか後戻りはできないぞ、と言っていますが、私自身ロータリーにどこまで深入りできるかわかりません。

ガバナーのご講演をお聞きして、混迷が深くなったような気がします。以上、とりとめないことを申し上げますこと、お許しください。

久野パストガバナーのお考えと同様に職業奉仕が重要であると思います。ロータリーとは職業人の集まりと考えており、職業を通じて社会に貢献する考えに賛同します。

現状のロータリークラブ、特に日本のロータリークラブが少子高齢化等環境、及び時代の変化で会員の減少という第4の危機に直面している事が、久野パストガバナーの言葉でより実感しました。そして、環境・時代の変化だけではなく原因は他にもあるのではないかと、「ロータリアンにとっての最悪の罪は憎しみでも何でも無い同じロータリアンのする事に無関心であることである」とパストガバナーが言われた事について自分自身でも反省する点があるのではないかと思います。

会員減少はどのクラブもかかえる問題であると思いますが、会員を増やすには、まず、ロータリーの目的や理念をしっかりと考え活動して行く事が大事ではないかと感じました。親睦と共にそういった活動をする事で会員のロータリーライフを充実する事が出来れば、退会者を繋ぎ止めることが出来、魅力あるクラブになれると思います。魅力あるクラブに成れば会員増強もしやすくなり会員も増やせます。

それともう一つ記憶に残った言葉が「足るを知る者は富む」昔からある言葉で「吾唯足知」の意味する事と同じと言っておられました。もう一度日常生活を見直そうと思いました。

久野バスタガバナーの今回のIM講演はストレートに今のロータリークラブを語っていただき大変感じる事が多い講演でした。せっかくロータリークラブに入っているのであればもっとロータリーの事に関心を持って例会や活動に参加するようにしたいと考えました。

「RCに入ってください」とこちらからお願いして入会して頂くような、勧誘と維持そのものを目的としていると、将来的にRCの弱体に繋がる。

私も全く同感で、RCの理念を理解し共感して頂ける方に、自ら願い出て入会頂くのがベターなのでしょうが、今の赤穂の情勢ではそう言った方はなかなかいないように思われます。かつてあったと思われる「ロータリークラブ」といったネームバリューが失われつつあるからなのでしょうか？

入会理由は人それぞれですが、まずはある程度の人集めは大切であると思います。前述しましたが、RCの理念を理解し共感して頂ける方に入会頂き、質を高めていくことは非常に大切ではありますが、私は人数の少ない組織に魅力は感じません。

結局、この増強については、RC永遠のテーマであるように思えます。

「量より質」なのか「質より量」なのか…。

私の中では、到底解決不能な問題であることは間違いありません。

しかし、この度講演を拝聴し、増強について色々考えることで、RCの様々な事柄、例えば職業奉仕についてなどですが、それらについても再度考える機会が得られたことは、今後自身のRCライフの糧になるのではと思います。

新渡戸稲造「武士道」早速購入致しました。

今までの講師による講演と違い、お話を聞きながら自分の頭の中がフル回転する有意義なお話を拝聴させて頂き、RIと地区、またクラブとのそれぞれの歯車がかみ合っていかなくなる危機感を覚えしました。会員増強、寄付(負担金)、それぞれの考えが想いから言葉へと変換する事によってズレが生じている感もいたします。

本来あるべきロータリーの精神が「時代とともに変化」していつているのか、「時代に合った変革をしていく」かによっても意味が変わってくると思います。

ロータリークラブも全盛期の敬愛する会員が高齢化してゆき、次世代の会員との考え方の違いも感じます。私は古き良きロータリークラブに憧れ、推薦していただき会員になることが出来ました。ロータリークラブは「横の繋がり」この言葉を胸にクラブ活動に参加しています。「縦も無ければならない」のでしようけれどそれはそれで、やはり「横の繋がり」を強靱にすることが大事だと感じています。

- 相生ロータリークラブ -

「IMに参加して」

相生ロータリークラブ 大川幸矩

4月22日、西播第2グループIMに参加し、久野薫パストガバナーのご講演を拝聴するという素晴らしい機会に恵まれたことを心から嬉しく思いました。

昨年4月、阪神第3グループのIMにおいて、久野パストガバナーのご講演を拝聴いたしましたが、パストガバナーは大変お疲れのよう見え、そして健康を害されている事も知りました。あれから1年、3月に喉頭癌の手術をされたとお聞きしましたが、長時間の素晴らしい講演をされ、中村パストガバナーと共に色々な質問にお答えされているのを拝見し、体調が良くなられたのだなと嬉しく思いました。

講演が始まって、「ロータリーの変質」に触れられ、職業奉仕を中心とした奉仕の理念実践という事がロータリーであったのに、楽しいだけの例会になり、ゴルフをはじめ、同好会を中心とした楽しみクラブになってしまった感がある。と述べられた時、頭にガツンと鉄槌を下された思いがしました。約30年前に、例会で、ある先輩会員が、週報に掲載された同好会の記事を指し、週報には遊びの記事を掲載するものではないと発言されていたことを思い出しました。入会当初は出来るだけ早く、先輩諸兄に追いつけるよう手続き要覧に目を通し、セミナーには持参していたのに2年前まで、そのような事も忘れていた自分を思い出し、ガバナー補佐に推薦され何も解らない自分が情けなかった事を思い出した瞬間でした。

講演はロータリーの歴史に則り進められ1990年頃から、一業種一会員がアディショナル会員、シニアアクティブとして同業種の会員が認められ、メーキャップは前後2週間で行えば良いというふうにならなくなり、色々と制度に規制緩和が加えられた。出席免除制度ができ、例会は軽んじられ、例会は人生の道場でなくなったと憂いておられた。私のような、いいかげんな会員にとっては良い規制緩和だと思っていたのだが…。ロータリーの例会は「人生の道場」であり、ロータリーは人材を育てる所であり、面識を広める場所でもあるという事を再確認した時でした。今回のIMのテーマは「ロータリー“原点への回帰”」でした。私も初心に戻らねばと思い、そして、もう少し真面目にロータリーに取り組もうと思いました。

現在会員数の減少、特に日本の会員数の減少、会員増強についてまでも話は言及された。幸い、相生クラブは退会者が少なく会員数は維持されているが、高齢化しているので元気いっぱい若い人の入会が必要だといつも思っているのだが…。「新入会員を推薦するには、推薦者自身がロータリーとはどのような団体かを理解せねばならない」と指摘され、ロータリーの理念は「奉仕の理念」であり「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針」決議23-34号第1項に「ロータリーは基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕「超我の奉仕」の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」という実践原理に基づくものである。」と要約されている。これは他人の事を思いやり、他人のために尽くすと言い換えることができ、究極の利他である。と教えていただきました。

国際ロータリーとロータリー財団の関係についても詳しく講演され、ロータリー財団の使命、世界の6つの重点分野など、より深く理解できました。

最後に、21世紀の哲学は、「足るを知る者は、貧しといえども富めり」ということではないでしょうか。「足るを知って、今の生き方を変えずして、今のようなロータリーに無関心な生き方を変えずして、夢を獲得する特効薬はありません。」と我々に投げかけられて結ばれた。

シカゴにてポール・ハリスが4人の職業人と語らって RC は 1905 年に誕生し、職業奉仕を中心として活動を始めてから、色々と形を変え、112 年という長きにわたって活動を続けているロータリーについて順序よく、解りやすくお話しされ、久野パストガバナーのロータリーに対する取り組み、考え方、等に芯から感動したご講演でした。この講演録でロータリーの教科書を作るつもりと久保ガバナー補佐が話されていましたが、できると確信致しました。感想文でなくレポートになってしまいましたが、大変骨身にしみるご講演をありがとうございました。このような勉強の機会を与えて下さった久保ガバナー補佐、上林 IM 実行委員長、龍野ロータリークラブの皆様に衷心より御礼申し上げます。

西播第2グループ IM 久野薫 PG の講演 “ロータリー”原点への回帰を聞いて - 抄録

相生ロータリークラブ 半田 齊

お話はいつもながら明快で、久野薫パストガバナー(以後 PG)のロータリーへの熱い想いがほとばしり出ていました。体調を崩され未だ万全ではない状態で、1 時間半立ったまま、熱心に話し続けられ、鬼気迫るものを感じたのは私だけでないはずで。

日ごろ久野 PG がお話されている、変質するロータリーを憂える内容でしたが、ロータリーの112年の歴史を振り返り、今までの3つの存続の危機をどうやって乗り越えてきたか、4つ目の危機をどうやって乗り越えるべきか、30年の会員歴を持つ久野 PG の考えを伺うことができました。お話の中で特に心に残った言葉をここに書き記し、記憶にとどめたいと思います。私の抄録になります。

ロータリー存続の危機

- 2000 年以後“奉仕の理念”を育むための制度の中枢に規制緩和が加えられ始め、奉仕の哲学の追求より奉仕活動の実践が重視され、例会はもはや「人生の道場」ではなくなりました。
- 世界一の NPO 法人を目指すロータリーにとっては、会員数の減少は、致命的なのです。ロータリー財団(The Rotary Foundation:TRF)を通じた成果によって、世界にアピールしようとするロータリーにとって、その財政的基盤を揺るがす大問題であります。わが国の捉え方は少し違います。1990 年以後、国際ロータリー(以後 RI)が奉仕哲学の追求より、奉仕活動の実践を重視するようになった、RI 方針に対する危機感であります。人づくり組織から NPO 法人化した RI への危機感なのです。
- 今では、日本のロータリアンは、(中略)ことロータリーに関しては無関心、無感動、無責任、無気力であります。そしてクラブ自治権と称して何もしない自治権を振り回し、ますます RI から遠ざかってきております。

職業奉仕の萌芽と変遷

- われわれの考える、“職業を通じた社会への奉仕”とは、職業を営む行為の中に“奉仕の理念”を実践することであり、職業を離れた所に職業奉仕はないと考えるのですが、RI は Code Of Conduct に見るように単に職業上のスキルを利用した社会奉仕と考えるのです。そこには、哲学は不要であります。だから「奉仕の理念の習得には、就労経験の有無とは関係がない」という認識が RI で蔓延しているのです。
- むしろ日本の職業奉仕観こそが標準であるべきと我々は考えているのです。職業奉仕哲学の軽視は、今日の第 4 の危機の一因をなしているのです。今後再び、RC の親睦のエネルギーを削いで、危機を迎えないために、RI というロータリークラブの連合体を作る必要があったのです。ここで RC は RI に 奉仕哲学の解明、ロータリーの拡大、情報媒介の三つの機能を委託したのです。

- この危機の後、1910年、ポール・ハリスは「Rational Rotarianism」の論文の中で「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と大悟し、寛容の重要性を説いております。この意味で1910年が「ロータリーの思想の原点」と考えることが出来ます。“寛容”がロータリーの思想の原点なのです。寛容は東洋思想の属性であります。(中略)以後のロータリーの歴史は、西洋思想と東洋思想のせめぎ合いの歴史であったように私は思います。
- 前文を“奉仕の理念を意義ある事業の基礎とすべし”と翻訳すれば、職業奉仕こそがロータリーの目的と解釈されるのです。西洋では、職業奉仕は他の奉仕部門と同列のもので、奉仕の理念を適用すべき、一部門にすぎないと考えられています。われわれ日本のロータリアンは、5大奉仕部門の中でも、とりわけ職業奉仕において実践しようとする組織がロータリーと考えているのです。職業奉仕に対する抜きがい東西の温度差であります。

ロータリー財団の成立とRIとの関係

- TRFは何故生まれてきたのでしょうか。RIは奉仕哲学の解明のために、その哲学と実践原理を提唱することはあっても、実践に移す組織ではありません。したがってRIの方針に従ってこれを実現するための事業を行う組織が必要であります。その組織として生まれたのがTRFであります。(中略)1928年RIから独立してTRFとなり、1931年教育、人道的事業に特化した信託組織となりました。ロータリー財団の正式名は、「国際ロータリーの、ロータリー財団」であります。
- TRFはRIの方針に基づいて、教育的、人道的プログラムを実践する慈善事業組織と定義づけることが出来ます。あくまでRIのTRFであり、RIの下部組織であります。しかしRIは社団法人、TRFは財団法人です。
- ポスト-ポリオプログラムは世界平和への支援だと思えます。これは既に始まっています。1997年6つの平和センター設置、2002年世界平和フェロシップ制度発足であります。

2016年規定審議会

- ロータリーは、会員減少からくる第4の危機に直面して、会員身分、例会開催頻度、出席義務、入会金に関して、クラブ自治権の拡大を認めました。クラブ定款に例外規定を設け、上位規定を下位規定で否定するという異例の措置をとったのです。
- 職業分類表に関しては、既に1968年、RIの直接監督権を放棄し、クラブの自治権に委ねられております。(中略)もしそうならば、1915年RIが地区制を引いてクラブを直轄管理する体制から、各クラブをRIBI(注;グレート・ブリテンおよびアイルランドの国際ロータリー)のような中間管理組織と認め、間接的管理制度に変換したという、それこそまさにRI創設以来の大変革ということになります。

ロータリーの抱える課題そして将来

- 2001年頃からRI理事会により幾度となく実施されてきた、各種の試験的プロジェクトの結果が大きく規定審議会で採択される傾向があります。しかしホーソン効果(プラセボ効果の一部。改善があったかのような態度を、意識的や無意識的に行うこと)という心理学的用語があります。必ずしも正しい結果を生むとは限らないのです。以って肝に銘ずべきであります。
- こんな状況にあって、人づくりロータリーへの回帰は可能でしょうか。RI理事会を挙げて、職業奉仕が忘れ去られた今、それが可能でしょうか。
- 文明は普遍的で、かつ蓄積します。生命現象と等しく、時間の関数で時計の針を逆に回すことは出来ないのです。一方、文化には普遍性はなく、蓄積もしません。しかしある時期、ある場所で、復活、回帰する力を持っております。ロータリーは文化なのです。(中略)人づくりロータリーへの回帰の鍵

は、アメリカではなく、東洋、とりわけ日本にあると思うのです。

- “日本の国柄”は“情緒の心”と“形”であります。日本人の日常生活で大切にされてきている、“惻隱の情”、“卑怯を憎む心”の源泉であります。そこには論理では説明できない、問答無用の世界があり、これが家庭、学校における教育の基本をなすものなのです。
- 21世紀のロータリーが、職業奉仕を中心に踏まえた人づくり組織として回帰し、隆々と栄えたあの20世紀初頭のロータリーを夢見るならば、日本のロータリアンの果たすべき役割は大きいと思います。
- ロータリーが歩みを共にしてきた資本主義は、専門家の見るところ21世紀には終焉すると言われます。資本の自己増殖能力が失われたからであります。会員が減少するロータリーに終焉はないのでしょうか。数字のみを追いかけている間は、崩壊するのです。足るを知って、今の生き方を変えずして、今のようなロータリーに無関心な生き方を変えずして、夢を得る特效薬はないのです。

変化をもたらすべきは私たち自身であると、久野 PG は訴えられたのだと思いました。

「向き合うこと」

相生ロータリークラブ 平田 雅義

久野パストガバナーの御講演を拝聴して、私は大きく自分の考えが間違っていなかったと、そして、これからも信じてやっていこうと考えるに至りました。その機会をいただいた事に改めて感謝しております。

私は現在42歳。会社を継承したのが平成17年で、12年が経ちました。

継承した年、統計開始以来初めて日本の人口が自然減となりました。これから市場は縮小され、ネットというツールがお客様の商品知識を我々より豊富にし、私のような若手がどのようにしてお客様から信用を得られるかと不安な気持ちの方が強かったように思います。と同時に仲間と今から頑張っていこうという漠然とではありますが、期待に満ちた感覚もあったように思います。

まずは人様から信用していただく。この事だけを考え、自分の信じるやり方で事業を営むと。信じる。信じてきた事というのが、ロータリークラブに入会して耳にした『職業奉仕』という言葉です。最初この言葉だけでは『信じてきた事』にはつながりませんでした。先輩から教えてもらい、自分が事業を営むうえで大切にしてきた事と知り、少し自信がついたのを覚えています。

『買い手よし、売り手よし、世間よし』

実はこの言葉に出会ったのは、社長と呼ばれるようになって数年経ってからでした。

重複しますが、いかに既存の取引先から、世間様から、信用していただけるか。という事ばかりを考えてきました。沢山の同業他社がある中、弊社へ御下命いただくにはどうするか。沢山の同業他社がある中、協力していただける業者、『協力業者』をいかに確保するか。そして、沢山の働く場所がある中、いかに弊社で頑張ろうと仲間に思っていたか。

私が入社した頃、従業員の入れ替わりが激しく、協力業者についても同じ事が起きていました。これでは誰も信用していただけないと感じ、私が社長になった時、真っ先にこのバランスに着目した訳であります。

皆様のおかげで私が継承してからは、家の事情、高齢によるもの以外は、退職する人も無く今日を迎えられ、業績についても就任以来プラス成長という大変有難い結果となっています。

『誰も見ていない月は存在しない月は人が見た時初めて存在する』

所属する組織を見ずして、向き合わずして次につながるのか。所属する組織に興味がなく楽しい

ものなのか。私が自分の会社(組織)と向き合った時、商いの中でどう社会貢献していくか。世間は何を求めているのか。という事を大切にしてきたこともあってか、この言葉は凄く印象に残りました。

入会時、私は社会貢献をどうしていくのかを模索しており、弊社で出来ることも大切ではありますが、そういった考えをもった人達の集合体である、ロータリークラブに所属すること自体が社会貢献につながるものと考えました。

ポリオ撲滅運動、米山奨学金制度、これら2つは入会前に説明していただいた活動内容であり、そういった活動の一員に加えていただけると考えました。

しかし、久野先生のお話を聞き、本質は週1回の例会に出席し、その例会を自己研鑽の場とし、その結果が事業を営む行為が研鑽される。これが

『三方よし』

につながると思い出しました。

事業継承をし、どうすれば『三方よし』となりうるのか。その事ばかりを模索していた自分自身が忘れていた事だと気づかされました。

入会してあと数ヶ月で3年。ロータリークラブに少し近づけた気がします。

『患者は経験に学び賢者は歴史に学ぶ』

まずは出来事の羅列ではなく、歴史を学び現状の分析を試みる事と同時に、私なりに照合、未来を展望してみたいと思います。

事業を営むうえで大切にしてきた事を思い出させていただき、ロータリークラブと向き合う切っ掛けをいただいたと思います。足を知らうとし、現状に満足せず、会社と向き合い、ロータリークラブと向き合い、職業奉仕という夢を見ていけるロータリアンになれたらと思います。

クラブの先輩より御身体が優れないと伺いました。そのような時、長時間にわたりお話し下さり本当にありがとうございました。

「初めてのIM」

相生ロータリークラブ 鳴瀬謙一

ロータリークラブ在籍が丸1年の私には、今回のIM、とりわけ久野パストガバナーの御講演内容がどれ程理解できたのかは疑問ですが、逐一自問自答しながらの時間を過ごしていました。中でも「会員個々の意識が低下し、ロータリー自体が危機的状況にある」は、経験値が少ない私にとって甚だ理解できませんでした。確かにどんな団体でも員数が減り、運営する事に窮している現状ですが、伝統も格式もあるロータリークラブに於いては当てはまらないものと思っていました。それが、会員増強が裏目に出て、会員ひとりひとりの意識が低下している状態なので個々のクラブが弱体化している現況であるとお話して、私も元凶の一因なのかと寂しくなりました。続けてクラブの在籍理由として「間違っただエリート意識」「職業上の旨味」「単楽的な親睦を求めて」を挙げられ、このような個人の考えが資質低下の大きな原因であると言及されていましたが、今の私には中々理解できません。確かにその事だけを100%の目的として、ロータリークラブの名を語って籍を置いているのはどうかと思いますが、誰も少なからず持ち合わせているのではないのでしょうか。是非の非であるかもしれませんが、現実その思いが強く入会した私は宛ら出遅れた競走馬の様な心境で、何とか少しでも差を詰めて行きたい心根です。

又、目的として「社会奉仕と職業奉仕は違う」「ロータリーは職業を通じての活動を主とする」と言うお話しですが、“奉仕”を辞典で調べると「国や社会また他人などの為に力を尽くすこと」とあります。この

事を、職業を通じて自分の過去の出来事に照らし合わせてみました。私どもは地元相生で石材業を営み、二代目として主にお墓を製造販売しており、あれは30年ほど前で、私が20代後半の頃でしたが、ある家のお墓を比較的難しい場所に建立した時でした。当家のおばあさんが、あと終いしていた若輩の私に向かい合って両手を合わせて「ありがとう。良いのをこしらえてくれてありがとう」と何度も頭を下げておられた姿を思い出しました。代金を頂いた上に商売として成り立ったとは別の“感謝”を頂いたのは、今も忘れる事はありません。確かに本質とは違うかもしれませんが、この“感謝”が職業奉仕に該当すると考えますし「他人を思いやる行動が奉仕の理想である」のお話しにも合致すると思われま

す。そして後半はRIの変遷を細かくお話していましたが、正直よく解りませんでした。ロータリー財団がどうか、RIは財団を優先にしてきたとか、今の私にはひとつの情報としてしか処理ができませんが「将来に向かってモラルを持ち合わせた東洋思想が必要である」はロータリーのみならず、渾沌とした現在の世界情勢に於いて特に日本がイニシアチブをとるべきだの、内容には大いに賛同致しました。ちょっと的外れかもしれませんが、外食産業のマクドナルドが全世界に拡張して行く中で、日本マクドナルドが独自のメニューやシステムを構築、展開してきた様にロータリーも地区地域の自治を認めても良いのではないのでしょうか。そこに揺るぎないマニュアルがあるのであればですが、その中で見いだされた真摯な日本人思考をRIに発信していければと思います。

最後に今回のテーマ“原点への回帰”は個々各々が色んな解釈できますが「賢者は歴史に学ぶ」と表現され、改めて私の様な雅拙なロータリアンが先人の想いを鑑みる素晴らしい内容の御講演を頂いた久野パストガバナーに心より感謝申し上げます。そして久野さんの体調を気使いながら丁寧にお話しされていた中村パストガバナー、本当に丹念な運営をされた久保ガバナー補佐、伊藤会長を始めとする龍野ロータリークラブの皆様、ありがとうございました。今度のIMで私自身が記したメモ書きは、また何年後かに目を通し、恐らく今と違った吸収が出来ればと思い、残して置くつもりです。

- 上郡佐用ロータリークラブ -

I.M にもとづくクラブアッセンブリー 報告書

会長 池田 雅子

I.M を振り返り、その中でも危惧されていた次の点について、上郡佐用ロータリークラブでは、原点に振り返り見つめなおしてみようと、3つのグループによるディスカッションでの意見交換の許、検証を行いました。

討議の要点

- 1、原点回帰の道として、ロータリーに対する無関心(無感動、無責任、無気力)な態度を改めるべきということであったが、当クラブはどうであるか。
- 2、ロータリーの目的の本質を学ぶ場である例会が、形骸化されていないか。
- 3、例会での情報交換のあり方、魅力あるクラブづくりについて。

以上を旨に、各グループにおいて会員たちが意見として述べられたことの概要を以下のとおり纏めました。

上郡佐用ロータリークラブについて

○最近の上郡佐用ロータリークラブは100%出席が続いており、会員のロータリーに対する意識は高いと思われる。

○上郡佐用ロータリークラブの例会が形骸しているとは思わない。会員スピーチの熱ある内容についても無感動や無責任、無気力など感じない。

○例会日を待っている。話せることが楽しい場になっている。

○他のクラブには感じられない独特の良い雰囲気がある。角がない。

○異業種の集団なればこそ、悩みが話せる。それが新しいエネルギーとなる。

○敢えてより改善を求めるならば、地域ニーズに強く応じた社会奉仕と、ロータリーに対する地域意識の改善を求められる組織に。

○青少年育成活動、交流なども順調なのではないか。

○親睦を築き上げる心がロータリーの基底ではないか。

ロータリアンとして、会員として

○自己向上の場だと思っている。

○ロータリーでの学習や活動を通し、一個人としての生き方、地域への奉仕と貢献のあるべき形などを学び、職業においても奉仕の精神が強くなってきた。有難うと素直に思えることが多くなった。

○個人個人に適応した成長の仕方があるべきだ。ロータリアンは画一的ではないはず。

○仲間として素直に付き合い、生きがいを感じるが多い。

RI、地区との関わりについて

○新しいことが発見できる。

○最近の RI や地区の考え方は変わったのではないか。

○ロータリークラブの自治権は、クラブ独自文化はどうなってしまったのか。

○ロータリークラブにはそれぞれの特性があって良いのではないか。

○ロータリークラブは寄付集めの集団なのか

○RI、地区役員の方は、クラブのことを本当に理解し、良くしようとしているのか。

○時代は遷り行く、ロータリーも変わっていくこれも自然、されどロータリーの基本は確定されているはず。

○これから先のロータリーは大丈夫だろうか。

○ロータリーの職業奉仕理論はどこへ行った。ロータリーは職業人の集まりでしょう。

グループ討議当日の意見は上記に集約されると思いますが、当日の欠席者からもレポートが寄せられましたので紹介いたします。

気楽な雰囲気の中で開かれる充実した例会。

* 例会は会員スピーチが中心で、相互の理解、学びの場として重要であり、そこでも男女・年齢・地域・職業等々バランスが大事では。

* 特に女性会員の活躍が、クラブの魅力アップにつながっている。

他のクラブの例会に出席をすることにより、刺激やヒントを得たり、取り組みを見て、アイディアの発想とすることが大事では。

これからの時代、固い枠で取り囲んだロータリーは生き続けるのだろうか。

私自身は自信がない。

* ロータリー衰因の一端には、発展途上の会員に対し、排他的なものがあるのではないか。

* 社会的地位が有り、寄付できる豊富な財力が有り、必ず例会や行事に出席出来る時間と人的余裕が有る方々のみがロータリアンか。ではないはず。

会員増強は重要で、活性化の源となる。

仕事を通じ自己研鑽を積み上げていく、自身の事業を高潔に発展させていく、これはロータリーで教わったこと。

等々の意見や現状の気持ち報告されてきました。

又、永い経歴を持つ会員が、この件についてレポートを寄せてくれましたので付け加えて報告させていただきます。

1) 原点への回帰

『ロータリアンの手引き』が以前と比べ内容が削除され薄くなったのはなぜだろうか。

セミナー等への参加者はその報告を綿密に行い、会員全体の理解として得られるよう、濃いものにして頂きたい。

個人的にも勉強すべきであるが、なかなか手が回らないのが現実である。

2) 例会出席による情報交換のあり方について

「ロータリーの例会は人生の道場である」と表現された方がおられますが、会員との語らいや有意義な卓話を聴き、和やかな雰囲気で開催することが望ましい。例会場の設定も検討すべき点もあるのでは。

3) その他

現在、世の中は複雑化して職業観が希薄化しているように思われる。だからこそ、ロータリアンが自らの職業を通じて、倫理ある職業人としての人格を常に備え会員一人ひとりがロータリーの原点への回帰を目指して、職業奉仕の実践と倫理を再構築する時期に来ていると考えます。

もしRIの考え方が、ロータリーの生きる道としてR財団を利用した社会奉仕や国際奉仕に力を入れたボランティア団体化するならば嘆かわしいことだ。

ロータリーのおかげで各会員があるのではなく、各会員のおかげでロータリークラブが有り、ロータリークラブが有ってこそRIがあるということを忘れてはいないか。

日本のロータリアン各人が思っている「ロータリーのあるべき姿 = 職業奉仕」への関心が、RIで薄らいでいるような気がする。日本の会員が減少しているのも、ここの影響が出ているような気がする。

今回の機会でご各会員より多くの気持ちが寄せられました。ロータリーに対する関心、上郡佐用ロータリークラブを思う気持ち、少々辛らつな言葉も多くありましたが、本当に上郡佐用ロータリークラブを大切に思い、真剣に取り組んでくださっているのだと、有り難くうれしく思っております。

まとめとして

上郡佐用ロータリークラブ会員数は安定、それぞれの委員長を中心に会員全員で活動も行い、会員が同じ目的に向かって進み、地域のためクラブ発展のため、そして自分自身のために頑張っており、現段階では形骸化はしていないと思います。他クラブと比べるのではなく、もっと自分のクラブに自信と誇りを持ってよいのではと感じました。

ただ私が入会した当初は、ロータリー歴の長いベテランの会員が新入会員に、ロータリー理念を例会後30分ほど教えてくださいました。その時は、ロータリー用語もわからず、その方が何を言いたいのかわかりませんでした。年月が経つにつれ、やっとその意味が解ってきました。例会にロータリーの理念をもう少し勉強する機会が増やせればよいなと思っています。

ロータリー歴の浅い会員には、ロータリーの理念が難しくなかなか理解しにくい部分が多くあります。そこで挫折する方も多く、例会が楽しくなくなり、親睦のみを求めるケースもあると思います。親睦あつての奉仕、奉仕あつての親睦で、どちらかに偏ってはロータリーでないと思います。哲学的にロータリーの奉仕の理論を説かれると、ロータリー歴の浅い会員は戸惑います。ロータリーの奉仕の理念は東洋的思想に近いので、二宮尊徳、近江商人、道元、故事などを身近なこととして例を出しながら説明していくと、興味を持ち、ロータリーの奉仕の理念に入りやすくなるのではと思います。

I・Mの講演で、日本のロータリーと国際ロータリーでは、職業奉仕に対する大きなギャップがあり、日本以外では単なる奉仕部門の一つと見ているようですが、日本はロータリーの使命を職業奉仕に求めています。東日本大震災の時に、災害直後でも略奪や窃盗がなく、スーパーでは代金が払えない人のために、名前を記入して後で払いに来てくださいと言って、商品をお客さんに渡したり、商人も機に乗じて値段を吊り上げたりしませんでした。そしてお客さん側も自分達だけでなく、沢山の人たちに品物が回るよう最低限だけ購入する、という行動が海外の人達からも絶賛されました。そのような行動ができるのは、日本人が奉仕の精神や職業理念観を、小さな頃から親や学校教育から学び、自然と身に着けているからだだと思います。そのことから職業奉仕の理念の重要性は計り知れません。しかし組織が大きすぎて国際ロータリーの考えを変えることは、なかなか難しいと思います。国際ロータリーの方針に沿いながら、職業奉仕理念に重点を置く日本独自の考えを取り入れ、活動していけばどうかと思います。

今回皆様の皆様方から頂いた貴重な意見をもとに、上郡佐用ロータリークラブをより一層素晴らしいクラブにするため、皆様の皆様と共に努力していきたいと思っております。

- 龍野ロータリークラブ -

2016-17 Intercity Meeting を終え、久野パストガバナーによる「ロータリーの夢と哲学 - 21 世紀のロータリー」の講演を踏まえて、龍野ロータリークラブでは3つのグループに分かれてディスカッションを行った。それぞれ、グループA「ロータリーの職業奉仕について」、グループB「会員増強について」、グループC「例会について」というテーマが設けられた。意見が集約されたようなものではなかったが、クラブ会員それぞれの考えを以下に留めたい。

Group:A ロータリーの職業奉仕について

1. ロータリーの職業奉仕哲学とその実践

Service above Self - He profits most who serves best.

超我の奉仕 - 最も奉仕する者、最も多く報われる

これは他者の利益の最大化を考える、ということである。自分の利益と利他との兼ね合いをよく考えるべきである。このように考えながら実践を積み重ねることで、素晴らしい人生を送ることができる。

奉仕がどのようなものであるかは、国によっても考え方は違うはずである。日本語の訳のほうが奥行きがあるように思う。ロータリーの奨学金に関する考え方も、I serve であるのかどうか議論があり、また、多様である。最近の行き過ぎた資本主義のなかで、この哲学が薄れてきている。

会社は利益を上げる目的で設立されるが、そのなかで職業観をもって職務に従事するかどうか。取り組みに最終ゴールは無い。

何に対して奉仕するのか。奉仕した結果、どういうことが起こるのか。報われ方は人それぞれではないか。たとえばお風呂で温かい水を向こうに押してやる事で、自分にも温かい水が還ってくるように。職業を通して、また時には職業にとらわれずに、考え続けていきたい。

職業奉仕の前に、奉仕とは何かをまず考えること。奉仕とは、心の使い方である。奉仕が職業の場面で現れるのが職業奉仕である。

平素から奉仕のなかにどっぷりと身をおくことが肝要。ざるの中に水を入れるな、水の中にざるを入れておけ。

会社は社会の公器。私は、会社では、『喜びの種をまこう』という理念を有している。私は社員さんたちと一緒に学んでいる。それが私の哲学とその実践である。

他人が喜ぶ商品を作る、利益を上げる、従業員の生活を支える。その中に職業奉仕がある。今やっていることを一所懸命にやり続けることが大事である。

Profit は、先人ロータリアンの著作などを見ると経済的な利益であると語っている。私は、Profit は、経済的な利益以外の精神的なものも含むのではないかと思っている。そうでなければ時代を超えた真理とは言えないのではないか。

職業奉仕とは、他人のために奉仕する、日々の実践のことである。

2. 職業奉仕と社会奉仕、いずれを重視するべきか。また、この点を深く議論するべきか否か。

職業奉仕か社会奉仕か、どちらを重視するべきか、ということではない。RI と日本のロータリーの二者択一でもない。奉仕という点で両立している。日頃から奉仕に浸かっていると、全てが奉仕の実践になる。

職業奉仕も社会奉仕も、奉仕の精神自体が多様化してきている。何に対して奉仕をするのか、勉強し続けることが大事である。

職業奉仕というのは分かりにくいですが、ロータリーの先輩からは、『社会奉仕は、他人にすること。自分にするのが職業奉仕』という言葉いただいたことが心に残っている。

日本人の奉仕とアメリカ人の Service とはニュアンスが違う。日本では奉仕の哲学的な面に目が行きがちであるが、アメリカでは Service は、小さいころから実践することとして身に付いているのではないか。

奉仕の哲学に関して、海外では日本のガラパゴス化が見直されてきている。日本のロータリーの精神に繋がるのではないか。

Group:B 会員増強について

1. "量"か "質"か

協調性のある方なら、“質”を問わなくてもよいのではないか。それより楽しい例会が必要で、例会が楽しければ会員維持に繋がるのではないか。

やる気、元気、根気のある人にぜひ入会して頂きたい。協調性も入会してから勉強して頂いたらよいのではないか。

よく学び、よく遊ぶのがよいのではないか。自分を磨いていくように指導するのが推薦者の責任で、クラブ全体で、新入会員を育てていく必要がある。シニアリーダーの方が、ロータリーに冷めないで、後継者育成に努めて頂きたい。

絶対に“質”だと思う。龍野ロータリークラブを外から見たときに、“品格”のあるクラブでありたい。だから、クラブへの入会は敷居を高くする必要がある。個人の資質の高い人に入会して頂きたい。

ロータリークラブが団体としての存在感を保ち得たのは、それなりに会員の意識が高かったこともあったと思う。そういうものが無くなれば、クラブが変質していってしまうのではないかと心配している。入会手続きなどで、暗黙のルールがあった。その精神だけは大事にしたい。

入会后、自分に誇りを持てるようになった。例えば、車の運転など、自分の行為も行儀よくなったと思う。この“誇り”が今の自分の核になっていると感じている。

龍野ロータリークラブに入会した頃には、こういう方に近づきたいという人が居た。

2. 勧誘と拡大

あと3人くらいの増員は欲しいが、龍野ロータリークラブの人数は少なくないと思っている。

私が入会して良かったと思っているので勧誘している。ただ、勧誘に当たっては、私自身が目利きをしているので、これを以て、“質”と考えて頂きたい。そして、量は要ると思うので、新入会員が新たな新入会員を連れてくるような連鎖を続けて頂きたい。

品があるクラブにしたいと思う。会員増強にあたっては、外の顔と内の顔を見極める必要があるのではないかと思う。

龍野ロータリークラブの伝統は、入ってからでないといけないと思う。自分の周りにどのような人が居るかを考えた場合、会員を増やしたいと思うが、入会を勧め難い。声が掛けられない原因は、クラブに馴染まないと感じるからで、手当たり次第には推薦できない。

声を大にして、「龍野ロータリークラブは良い」と、どう伝えればよいのか分からない。

寄付ができる人を育てる会だと考えている。勧誘のときに伝えないといけないことは、前以てロータリークラブの資料を渡しておくといよいのではないか。その人のためになるかも考える必要があると思う。

会員増強に当たって、居住地区内のことは分かるが、地区外のことはよく分からない。宍粟市内には色々な会があるが、寄り合うといつも同じメンバーで、世界が広がらない。週1回でも龍野ロータリークラブに来ると世界が広がる。

Group: C 例会について

久野パストガバナーは、“現代の例会”について、“凜とした雰囲気”や“哲学”が失われ、もはや学びの“道場”ではなくなり、“楽しいだけの例会”になり下がっていると辛辣に批判されましたが、当クラブメンバーの意見は次の通りでした。

当クラブの例会の印象は、発足当初から例会場に入場した瞬間から緊張で“凜”とした雰囲気が漲る“道場”であり、同時に初代会長以来、親睦を重んじる風潮もあり、それが適度にコラボして独特の“緊張感ある心地良さ”がある。

時代の流れにつれ、近年は、例会自体が緊張より若干親睦が優先される傾向にあるが、当クラブは凜とした雰囲気もしっかり残っている。

入会最初、緊張や不安があったが、今は楽しく心地良いと感じている。

新人の頃は例会に凜とした空気があった。今は慣れか年齢からか、凜としたものは感じられない。

今尚、例会に来るのが楽しみ。常に例会をどうするかという問題意識を持つことが大切で、凜とした雰囲気は会員の考え次第と考える。昨今、時代の流れや仕事の為とはいえ、欠席が多いのが残念である。

環境や年齢により、例会の印象は変わるが、当クラブはロータリーの精神を高め、緊張した雰囲気を醸成する気概に満ち、他クラブに較べて格調高い良い雰囲気がある。また、時折、IM等で互いに気を引き締めることも大事で、安きに流れてはダメだ。

例会は楽しく過ごすように努めている。リラックスした中にも得るものがあり、それが自分へのメリットとなることを期待している。

メーキャップをした経験は多いが、大都會の例会ではビジターや早退者も多い。また、当クラブは会員中心の卓話が多いのに較べ、大都會は有名人の卓話もあり、バラエティに富み刺激があるのでそんな例会も良いかもしれない。

以前、内外の卓話者に例会終了後、ベテラン会員が直に御礼を述べることもあったが、これは良い習慣で、当クラブに対して良い印象が残ると思われる。

例会は先ずコミュニケーションが取れる場であればと考える。例会の卓話は、ベテラン会員は外部の招聘でもよいが、新人は自分の話をするように努めた方がよい。また他クラブのインターネット例会は個人的には賛成できない。

例会は年齢や慣れにより、凜とした雰囲気が薄れるが、常に気を締めて行くことが大事。

凜とした例会が変わるのは、主に会員が変わるからである。時代に連れ、特に大御所的会員が退会されるのは仕方がないが、他クラブで実施されている例もある様に、例会の在り方について、時々の見直し等を検討することが大切であると考えます。

かつては、当クラブの入会資格は厳しく、例会場に礼をして入場していた。時の流れと共に他クラブに於いては同好会的な仲良しクラブも増えている中で、当クラブは今後も当時の様に心地良い緊張のある例会を目指していきたい。

2. 例会の座席について

例会での座席については、一部固定化していた時代もあったが、現在は隔月に全体で変更されているので、様々な会員とコミュニケーションが取れて、例会の本来の趣旨からは有効であると考えます。

前列は精神的にも肉体的にも緊張が高く、後列は比較的リラックスできる印象がある。この為、現状通りの適度なローテーションに賛同する。

インターシティミーティングを終えて

I.M.実行委員長 上林 勝

本年度のI.Mは、久保泰造ガバナー補佐が提唱されました“ロータリー”原点への回帰をテーマに開催致しました。

第一部ではR1第2680地区パストカバナー久野薫様に「ロータリーの夢と哲学～21世紀のロータリー～」との演題でロータリーの根幹を語って頂きました。

その後、久野パストガバナー、中村パストガバナーと当クラブ久保泰造会員、官野英彦会員による質疑応答の時間を設け、より深くロータリーについての解説をして頂きました。

第二部の懇親会では、I.Mのもう一つの目的である会員相互の親睦を深め、その輪を拡げて頂きました。

最後になりましたが、来賓としてご臨席頂きました、パストカバナー滝澤功治様、カバナーエレクト瀧川好庸様をはじめ、地区内の多数のカバナー補佐の皆さまありがとうございました。

そして、全員登録の上、当日も多くの皆さまに参加頂きました赤穂ロータリークラブ、相生ロータリークラブ、上郡佐用ロータリークラブの皆さま、本当にありがとうございました。

心より御礼申し上げますと共にこの記録誌が我々ロータリアンにとって生涯のバイブルになれば幸いです。ありがとうございました。

2016 - 17年度 I . M . 実行委員会組織図

